熊本大学
永青文庫研究センター

年　　　　　報

第16号

2 0 2 5
熊本大学永青文庫研究センター

はじめに
―永青文庫研究センター設置15周年によせて―

本センター設置15周年にあたる本年度、熊本大学附属図書館に寄託されている永青文庫の歴史資料9,300点余が、国重要文化財に指定されることが確定的となりました。

永青文庫の歴史資料群は、質・量ともに中世から近世にかけての日本最大級の史料群で、古くは細川忠利など歴代藩主の菩提を弔うための寺院であった妙解寺の跡に建てられた北岡邸の蔵に保管されていましたが、1964年以降に熊本大学附属図書館に寄託され、現在に至っています。よく知られた織田信長の書状群などのほか、特に近世期の膨大な当主書状類や裁可文書群、さらに藩政（行政）記録類が充実しており、日本近世の基礎資料として比類なき価値を持つものです。そこには統治、自治、法制、建築、土木、科学、文学、教育、美術ほか、人間活動のほとんど全域に及ぶ情報が集積されており、詳細な目録の作成と公表が行われれば、歴史研究のみならず、さまざまな領域で新たな知見をもたらすことが予想されました。そこで熊本大学では、2009年４月１日に永青文庫研究センター（当初は文学部附属）を立ち上げ、熊本県からの受託研究という形で「永青文庫常設展示振興基金」の配分を受け、歴史資料等の総目録の作成を開始しました。

「熊本大学寄託永青文庫資料総目録」（約５万7,700点分）は2015年11月に完成し、公益財団法人永青文庫や熊本県立美術館をはじめとする関係各機関に共有されて、研究や展覧会の企画立案等に活用されています。

その間の2013年６月には、織田信長の手紙58通を含む「永青文庫細川家文書」266通が国重要文化財に指定されました。今度の指定はそれに追加するものです。

2022年以来、文化庁文化財第一課と熊本大学永青文庫研究センター、公益財団法人永青文庫は、上記「総目録」記載データと資料現物との一点ごとの引き合わせ確認作業を継続しています。このたび追加指定される予定の永青文庫細川家文書9,300点余は、この引き合わせ作業を完了した分で、全国的にも貴重な文書が多数含まれています。

「永青文庫常設展示振興基金」の設置に尽力された方々、またお力添えいただいた企業・団体のみなさま、目録作成や引き合わせ確認の作業にご協力いただいたすべての方々に、厚くお礼申し上げます。

また、本センターの設置15周年にあたって、それを記念する織田信長文書の展覧会を開催することができ、センター設置以来の信長文書研究の成果を一冊の書籍に集約することが叶ったのも、本年の大きな収穫でした。公益財団法人永青文庫と、本展覧会と出版に惜しみないご協力を賜った方々に、記して感謝いたします。

2025年２月25日

熊本大学永青文庫研究センター長
稲　葉　継　陽

目　　次

はじめに ………………………………………………………………………… 1

1．年間活動記録……………………………………………………………………… 4

2．年間活動報告………………………………………………………………………10
⑴ 組織運営 ………………………………………………………………………10
⑵ 研究活動 ………………………………………………………………………10
⑶ 展覧会・講演会・社会貢献等 ………………………………………………16
⑷ センターの運営資金 …………………………………………………………18

3．個人年間活動………………………………………………………………………19

4．ニュースリリース・記者発表要旨………………………………………………26
⑴ ニュースリリース
熊本大学と TOPPAN、くずし字 AI-OCR を活用した
古文書の大規模調査のための独自手法を開発 …………………………………27
⑵ 記者発表資料
室町幕府滅亡約１年前の織田信長書状を発見
細川藤孝にすがる信長「あなただけが頼りです」………………………………32
⑶ 記者発表資料
永青文庫が熊本大学に寄託している貴重資料のうち
新たに9,346点が国の重要文化財に ………………………………………………38

5．講演要旨……………………………………………………………………………44
⑴ 稲葉継陽「信長・藤孝・光秀―「室町幕府の滅亡」と
「本能寺の変」―」 ………………………………………………………………45
⑵ 今村直樹「横井小楠の人脈と思想形成過程」…………………………………50

1．年間活動記録（講演、会議、打合せ、取材等）

日　付	活　動　内　容	担当・打合せ先等
2024年４月２日	松本武祝科研研究会（オンライン）	稲葉・今村
４月５日	熊本博物館木山氏打合せ	今村
４月12日	熊本県富永部長ら、書庫見学案内	稲葉・後藤
４月13日	明治維新史学会例会報告	今村
４月18日	熊杏会北里柴三郎顕彰2024年事業講演会	稲葉
	TOPPANと会議（オンライン）	稲葉・後藤
４月19日	熊日出版来訪・打合せ	稲葉
４月20～21日	放送大学集中講義	今村
４月23日	甲佐町陣内城保存活用委員会	稲葉
４月26日	（公財）肥後の水とみどりの愛護基金理事来訪・打合せ	稲葉
５月１日	コロニー印刷室原氏打合せ	今村
５月２日	東大杉森科研打合せ（オンライン）	今村
５月11～12日	高知出張（高知県史）	今村
５月17日	多良木町教育委員会来訪・打合せ	稲葉
	熊本県文化財保護協会記念事業に出席	稲葉
５月19日	熊本日日新聞連載取材	稲葉・後藤
５月20～24日	松井家文書目録作成調査	参加人数：11人
５月29日	中世佐敷城調査検討委員会	稲葉
５月30日	トータルメディア担当者来訪・打合せ	稲葉
５月31日	南関城跡調査	稲葉
６月１日	熊本史学会春季研究発表大会	今村
６月６日	第１回永青文庫研究センター運営委員会	稲葉・今村
６月７日	TOPPANと会議（オンライン）	稲葉・後藤
６月９日	明治維新史学会大会報告	今村
	大学コンソーシアム授業模擬授業（於熊本学園大学）	稲葉
６月12日	高知県史（オンライン）	今村
６月13日	永青文庫伊藤氏来訪・打合せ	稲葉
６月14日	熊本日日新聞前田氏、来訪・取材	稲葉
	南島原市教育委員会伊藤氏撮影（於附属図書館）	稲葉
	福岡大学山田氏と打合せ（オンライン）	稲葉
６月18日	熊本県文化課・熊本学園大学小川氏と打合せ	稲葉

日　付	活　　動　　内　　容	担当・打合せ先等
	八代市立博物館山崎氏来訪・打合せ	稲葉
6月20日	熊本県医師会白濱氏来訪・打合せ	稲葉
	TOPPANと会議（オンライン）	稲葉
6月21日	人吉城跡保存活用検討専門会議	稲葉
6月26～30日	松井家文書目録作成調査	参加人数：11人
6月30日	放送大学熊本学習センター主催講演「永青文庫の織田信長文書－珠玉の59通－」	稲葉
7月1日	コロニー印刷室原氏打合せ	今村
7月2日	附属図書館と打合せ	稲葉・浜崎・佐藤・倉野（附属図書館）
7月3～4日	TOPPAN AI-OCRチーム来訪・打合せ	稲葉・後藤
7月4日	向井ゆき子氏来訪	今村
7月5日	さわやか大学校大学院講演会	稲葉
7月6日	高知出張（高知城歴史博物館講演）	今村
7月7日	高知出張（高知県史）	今村
7月10日	菊陽町文化財保護委員会	今村
7月12日	高森町史編纂委員会（於熊本日日新聞社）	稲葉・今村
7月22～26日	松井家文書目録作成調査	参加人数：11人
7月26日	熊本県文化財保護審議会	稲葉
	記者発表「熊本大学とTOPPAN、くずし字AI-OCRを活用した古文書の大規模調査のための独自手法を開発」	稲葉・後藤
7月27～28日	「地下文書研究会」書評会報告（於立教大学）	稲葉
7月30日	熊本日日新聞飛松氏来訪、取材	稲葉・後藤
7月31日	永青文庫理事長細川氏来訪	稲葉
8月2～4日	島根県津和野町出張（島根県古代文化研究センター研究会）	今村
8月8日	読売新聞北村記者来訪、取材	稲葉
8月9日	NHK取材（8月22日「クマロク！」内で放送）	稲葉・TOPPAN AI-OCRチーム
8月21～23日	文化庁による永青文庫史料調査	稲葉・今村・後藤・髙森
8月25日	「菊池氏遺跡」国指定記念シンポジウム講演	稲葉
8月24～25日	「口書」科研研究会（於愛媛）	今村・三澤・胡（愛媛大）・高槻（神戸大）・高野（九州大）・深瀬（熊本県図）
8月26日	熊本市歴史文書資料室上村氏打合せ	今村
	工藤四朗氏来訪	今村

日　付	活　　動　　内　　容	担当・打合せ先等
	永青文庫理事長、広報と記者発表打合せ	稲葉・後藤
	TOPPAN と会議（オンライン）	稲葉・後藤
8月27日	熊本日日新聞浪床氏、前田氏、来訪・取材	稲葉・後藤
8月28日	八代市立博物館未来の森ミュージアム協議会	稲葉
	TBS ラジオ取材（9月4日放送）	稲葉
8月30日	四国科研研究会打合せ	今村
9月2日	永青文庫常設展示振興基金運営委員会	稲葉
	熊本市美濃口	稲葉
	龍谷大学石塚伸一氏来訪	今村
9月3日	天草キリシタン館平田氏来訪・打合せ	稲葉
	TOPPAN と会議（オンライン）	稲葉・後藤
	熊本日日新聞・浪床氏、前田氏、来訪、取材	稲葉・後藤
9月5日	熊本日日新聞三國氏来訪、取材	今村
9月5～8日	東京出張（記者発表、書評会出席）	稲葉・後藤
9月6日	記者発表「室町幕府滅亡約1年前の織田信長書状を発見 細川藤孝にすがる信長「あなただけが頼りです」」	稲葉・後藤
9月11日	熊本県文化課丸山氏来訪	今村
9月14日	熊本近代史研究会9月例会報告	今村
9月17日	クラウドファンディング支援者向け古文書解説（於附属図書館）	稲葉
9月22～23日	京都出張、物集女城跡国史跡答申記念シンポジウム打合せ	稲葉
9月24日	熊本市歴史文書資料室講演	今村
9月25日	史跡棚底城跡整備検討委員会（於県庁）	稲葉
9月27日	㈱宰匠古文書修復打合せ	稲葉・後藤
9月28～29日	名古屋市出張（近現代史研究会9月例会）	今村
9月30日	熊本コンベンション協会黒木氏来訪	今村
10月2日	人吉城跡保存活用専門会議	稲葉
10月3日	さわやか大学校講演（於熊本）	今村
10月3～4日	東京出張、永青文庫秋季展ギャラリートーク	稲葉・後藤
10月7日	TOPPAN と会議（オンライン）	稲葉
10月11日	わくわく座 VR イベント打合せ	稲葉・後藤
10月13日	国際人文社会科学研究センター活動報告会	稲葉・今村

日　付	活　動　内　容	担当・打合せ先等
10月20日	宇城文化講演会 第５回講演会	稲葉
10月23〜27日	松井家文書目録作成調査	参加人数：13人
10月25日	TOPPANとの会議（オンライン）	稲葉
	高知県史（オンライン）	今村
10月26日	通潤橋“国宝”指定記念講演会（於山都町）	今村
10月26〜27日	高森町史編纂委員会調査合宿（於高森町）	稲葉・今村
11月１〜４日	東京出張（永青文庫記念講演「信長・藤孝・光秀―「室町幕府の滅亡」と「本能寺の変」―」、史料調査）	稲葉・後藤
11月２日	第39回熊本大学附属図書館貴重資料展（〜４日）「小楠に届いた手紙－横井小楠文書にみる幕末群像－」	今村・三澤
11月３日	第18回永青文庫セミナー（於附属図書館１階） ②「横井小楠の人脈と思想形成過程」講師・今村直樹 ②「『他の非をのみ唱え我が修行怠り候は士君子の恥ずべき事なり』―父としての横井小楠―」講師・三澤純	
11月６日	東大杉森科研研究会	今村
11月６日	菊池氏史跡調査検討委員会	稲葉
	東京出張、永青文庫にて熊本県知事に展示解説	稲葉
11月９日	菊池一族の歴史文化の調査研究成果報告会	稲葉
11月10日	「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」研究会	今村
11月13日	簗山氏来訪、簗山家文書について解説	稲葉・後藤
11月16日	九州医師会総会・医学会 特別講演	稲葉
11月19日	山都町教育委員会大津山氏来訪	今村
11月20日	中世佐敷城調査検討委員会（オンライン）	稲葉
	テレビ熊本池島氏来訪	今村
11月22日	多良木町相良氏遺跡保存活用委員会	稲葉
11月24日	放送大学熊本学習センター主催講演「信長の手紙」	稲葉
11月25〜29日	松井家文書目録作成調査	参加人数：13人
11月29日	JSTサイエンスポータルによる取材	稲葉
	NHK「先人たちの底力 知恵泉」取材・撮影（2025年１月21日初回放送）	稲葉

日　付	活　　動　　内　　容	担当・打合せ先等
11月30日	わくわく座トークイベント「「細川家文書」から読み解く江戸時代の熊本城」	稲葉・後藤
12月３日	さわやか大学校講演（於八代）	今村
12月４日	NHK スペシャル名古屋城取材（オンライン）	稲葉・後藤
12月６～８日	仙台出張、人文科学とコンピュータシンポジウムに参加	稲葉・後藤
12月７日	熊本史学会秋季研究発表大会	今村
12月11日	茶道裏千家淡交会 金光氏来訪・打合せ	稲葉
	ケンブリッジ大学との協定について打合せ	稲葉
	第２回永青文庫研究センター運営委員会	稲葉・今村
12月14～15日	放送大学集中講義	稲葉
12月18日	台湾師範大学スタッフに永青文庫資料等を解説	稲葉・後藤
12月20日	熊本県立美術館収集委員会	今村
12月21～23日	高知出張（高知県史）	今村
2025年１月６日	肥後里山ギャラリー村田氏	稲葉
１月10～13日	京都出張、物集女城跡国史跡記念シンポジウム	稲葉
１月14日	中国暨南大学の郭声波先生ら史料見学	稲葉
１月16日	TOPPAN と打合せ（オンライン）	稲葉・後藤
１月20～24日	松井家文書目録作成調査	参加人数：14人
１月20日	熊本県文化振興課来訪・打合せ	稲葉
１月22日	NHK スペシャル撮影（３月放送予定）	稲葉・後藤
１月24日	福岡市立博物館中野等総館長ら来訪、くずし字 AI-OCR を視察	稲葉
１月26日	高森町史編纂委員会（於熊本日日新聞社）	稲葉・今村
１月27日	BS イレブン収録（宮本武蔵）	稲葉
１月29日	史跡宇土城跡保存整備検討委員会	稲葉
１月31日～２月１日	水俣環境アカデミア市民公開講座講演	稲葉
２月４日	熊本県文化財保護審議会	稲葉
２月６日	甲佐陣内城整備検討委員会	稲葉
	朝日新聞取材（小笠原玄也）	稲葉・後藤
２月７日	くまもと彩発見観光講座	今村
２月９日	島根県古代文化研究センター研究会（オンライン）	今村

日　付	活　動　内　容	担当・打合せ先等
２月15日	シンポジウム「士族の『反乱』と廃藩後の地域」（於佐賀大学）	今村
２月17日	熊本日日新聞和田氏ら来訪・打合せ	稲葉・今村
２月18日	人吉城跡保存活用専門会議	稲葉
２月20日	八代市立博物館協議会	稲葉
	熊本日日新聞浪床氏来訪・打合せ	稲葉
２月23日	「咸宜園の日」記念講演会（於日田市）	今村
２月26～28日	松井家文書目録作成調査	参加人数：10人
３月１～２日	熊本史料ネット他主催古文書整理会（於熊本県博物館ネットワークセンター）	三澤・今村
３月３日	くまもと文学・歴史館深瀬氏来訪	今村
３月８日	主催講演会「熊本藩士上田久兵衛と幕末維新」（於熊本大学）	今村・髙森
３月12日	宇土市轟泉水道保存活用検討会	今村
３月12日	菊池氏史跡調査検討委員会	稲葉
３月15日	肥後の里山ギャラリー講座「永青文庫研究の最前線　戦国合戦の実態と豊臣政権」	稲葉
３月17～19日	文化財指定のための永青文庫史料調査	稲葉・今村・後藤・髙森
３月21日	記者発表「永青文庫が熊本大学に寄託している貴重資料のうち新たに9,346点が国の重要文化財に」	稲葉・後藤
３月22日	肥後の里山ギャラリー講座「永青文庫研究の最前線　士族反乱と旧熊本藩主細川家 」	今村
３月27日	「口書」科研研究会（オンライン）	今村・髙森
３月27日	公益財団法人永青文庫理事会	稲葉

２．年間活動報告

⑴　組織運営

本年度の運営は、主として専任教員の稲葉継陽教授、今村直樹准教授が担い、兼務教員として三澤純教授、日高愛子准教授がこれに協力した。また後藤典子特別研究員が研究・社会発信業務を専任教員と分担し、科学研究費補助金基盤研究（B）（研究代表者・今村）等によって雇用されている技術補佐員、大学院生および学部学生らも、史料のデータ化等の実務にたずさわった。

永青文庫研究センター運営委員会を通じての運営は、おおむね円滑に進められた。

なお、2024年９月２日に熊本県庁で開催された永青文庫常設展示基金活用委員会にて2024年度の事業計画を報告し、あわせて中間報告を行い、承認された。

⑵　研究活動

１）熊本大学に寄託されている永青文庫細川家文書が国重要文化財に追加指定へ

2025年３月21日、文化審議会（文化財分科会）は、公益財団法人永青文庫が所有し熊本大学附属図書館に寄託されている貴重資料のうち、歴史資料（以下、永青文庫細川家文書という）9,346点を国重要文化財に指定するよう、文部科学大臣に答申する運びとなった。

永青文庫細川家文書のうち、織田信長書状群をはじめとする中世文書等266点は、2013年に国重要文化財に指定されている。今回の指定はそれに次ぐもので、細川家の家伝の資料（御家の宝）と位置づけられた、17世紀初期から明治初期に作成された貴重な歴史資料群である。

今次の指定文書の中でも特に注目されるのは、戦国武将として著名な細川忠興（三斎）や、寛永期（1620～30年代）の明君と評価される細川忠利らの発給文書群、忠利やその後継者細川光尚の裁可文書群、寛永末期の細川家代替り（忠利→光尚）に際して家臣たちから相次いで提出された血判起請文（きしょうもん）群、忠利・光尚の相談役であった沢庵和尚が彼らに送った書状群などで、江戸時代初期の歴史資料としては質・量ともに類例をみない。さらに、19世紀に家臣団から藩主に上申された意見書・献策書等を取りまとめた「上書」65冊や、熊本城天守に保管されていた細川家歴代当主の甲冑の廃藩置県に際しての行方を示す証文群など、近世中期以降の貴重な文書も多数含まれる。

今次の国指定は、熊本県教育庁文化課所管の永青文庫常設展示振興基金（2008年設置）から資金配分を受けた熊本大学が、永青文庫研究センターを設置し、公益財団法人永青文庫と協力しながら、2009年から約７年半の歳月をかけて作成した「熊本大学寄託永青文庫資料総目録」（約５万7,700点分）のデータを基にして実現された。基金の創設と調査にご尽力いただいた各位に、深くお礼申し上げる。

２）永青文庫細川家文書の画像データ蓄積と分析

本年度も例年と同様、永青文庫細川家文書について、新たなデータの蓄積を行った。

撮影を実施したのは、近世前期の神雑一紙文書や誅伐帳などの241点（画像1,930枚）である。撮影された画像データは、熊本大学附属図書館貴重資料展などに活用されるとともに、共同研究推進のための素材として分析が深められる予定である。

３）細川家文書「口書」の細目録作成と共同研究

熊本藩刑法方の年次記録帳簿群である「口書」には、藩領で発生した犯罪・紛争などの被疑者や関係者の供述書と、刑罰の決裁過程に係る文書が収録されている。18世紀前半の正徳２年（1712）から幕末期の慶応３年（1867）まで、全131冊が現存している。「口書」に収録された供述書は基本的に庶民層のものである。

2023年度、上記「口書」の研究により近世民衆史研究の新展開を目指す研究課題「永青文庫細川家文書『口書』の総合的解析による日本近世民衆史の研究」（研究代表者・今村直樹）が、科学研究費補助金基盤研究 (B) に採択された。それを受けて本センターは、①「口書」収録事件の細目録作成、②収録事件の分析に基づく共同研究に着手した。

①の作業には、科研費で雇用された髙森荘子が主に従事し、計７冊分、829件分の細目録が作成された。その過程で発見された新史料に関しては、今村直樹「近世後期熊本藩の椎茸生産と周辺村」（後掲）が検討を行っている。②では、民衆運動・村落史、流通・経済史、法制史、障害史・女性史などの専門家を集めた研究会を、⑴2024年８月24日、⑵2025年３月27日の２回開催した。⑴は、愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センターとの合同研究会である。報告題目は以下の通り。

⑴　2024年８月24日　於愛媛大学法文学部
　今村直樹（熊本大学永青文庫研究センター）
　　近世後期の百姓的世界と藩権力―細川家文書「口書」を素材に―
　胡光（愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター）
　　細川家文書「口書」にみる近世の人々の移動
　松花菜摘（今治市村上海賊ミュージアム）
　　大島島四国の歴史と新発見史料について
⑵　2025年３月27日　オンライン
　高野信治（九州大学名誉教授）
　　病・障害からみた近世民衆史考―熊本藩刑事法制史料「口書」より―

４）TOPPNN 株式会社フロンティア事業開発センター事業創発本部研究企画部データベース開発チームとの共同研究によるプロジェクト「永青文庫資料と「くずし字 AI-OCR」の活用による17世紀社会論・公儀権力形成史の再構築」

稲葉継陽を研究代表者とする科学研究費補助金基盤研究（C）によって2023年度から開始された本プロジェクトでは、

①厖大な文献史料をいかに効率的に把握し活用するか

②世界史の近世化という大変動期にあたる17世紀の社会状況をどう実態的に把握するか

という、日本史研究の積年の二つの課題に正面から取り組んでいる。

具体的には、熊本大学に寄託されている永青文庫細川家資料に元和７年（1621）以降18世紀初期まで 280冊52,000丁もある細川家奉行所の日報、および関連する記録史料を、TOPPAN株式会社が開発した「くずし字 AI-OCR システム ふみのは」によってテキストデータ化する。その上で、「惣庄屋／迷惑／損／大雨／洪水／旱／虫／凶／飢／疫」などのキーワードを、TOPPAN が構築する検索エンジンによって検出し、当該期中部九州地域における天候災害に起因する飢饉と民衆生活への藩側の対応ぶりを把握・究明して、幕藩体制確立期の再把握を目指すとともに、その成果を「くずし字 AI-OCR」を活用した研究モデルケースとしても提示する計画であった。

そして2024年度、上記の計画どおり、「くずし字 AI-OCR」に永青文庫の初期藩政史料の画像データ50,000枚を処理させ、即時検索システムを構築することに成功した。このシステムによって、厖大な史料画像から災害関係キーワードを抽出し、洪水と飢饉の一定の相関関係をつきとめることができた。

調査結果の一端は情報処理学会・人文科学とコンピュータ研究会主催「人文科学とコンピュータシンポジウム MLA をつなぐデジタルアーカイブ」（会場：東北大学川内キャンパス）にて報告し、論文「くずし字 AI-OCR による「細川家文書」の翻刻と全文検索システムの構築」として公表した。また、2024年７月26日のニュースリリース「熊本大学と TOPPAN、くずし字 AI-OCR を活用した古文書の大規模調査のための独自手法を開発」や、同11月の熊本城ミュージアムわくわく座でのイベントにて、本プロジェクトの内容の周知をはかった。

５）松本寿三郎氏収集文書の画像データ蓄積

松本寿三郎氏収集文書は、元熊本大学教授である同氏が、私費を投じて収集した近世・近代の熊本藩（県）関係資料を主とする史料群である。古文書、古書、絵図などから構成されており、「肥後国誌」や「御刑法草書」といった貴重史料も多く含まれている。2017年度、松本氏から熊本大学文学部日本史学研究室に寄贈され、その後、本センターの総合調査によって約1,000点の目録が作成された。

本センターは、2023年度から同文書の画像データ蓄積を進めており、本年度は熊本大学キャンパスミュージアムのデジタルアーカイブズ事業の一環として、冊子文書や絵図など148点（画像5,180枚）を撮影した。

これらの画像データは、近い将来、本センター HP にて公開される予定である。

６）熊本大学所蔵松井家文書の目録作成

熊本大学附属図書館には、熊本藩の第一家老であった松井家に伝来した古文書・古記録（松井家文書）約36,000点が保管されている。本センターは2018年度から、松井家文書の目録作成事業を継続している。

目録作成事業では、センタースタッフのほか学外からの作業従事者も得て、附属図書館で一週間単位の集中調査を７回開催した（総日数33日、延べ人数83人）。その結果、約1,318点の目録を作成することができた。併せて目録調書のデータ化作業も進め、本年度は約2,600点の調書データの入力を完了した。

7）古閑家文書の目録作成

古閑家文書（古閑孝氏所蔵）は、総点数が20,000万点をこえる熊本藩惣庄屋史料の代表的存在である。2016年４月熊本地震の被災後、熊本被災史料レスキューネットワークにより救出され、現在は熊本大学で保管されている。

本センターでは、2019年度から古閑家文書の総合調査を進めてきた。本年度は、社会文化科学教育部の大学院生４名および文学部の学生３名が作業に従事し、近世一紙文書1,402点の目録を作成するとともに、近代文書1,671点の調書データの入力を完了した。

8）東京大学所蔵「上田久兵衛関係文書」の研究資源化と共同研究

東京大学史料編纂所が所蔵する「上田久兵衛関係文書」は、幕末期に熊本藩京都留守居として活躍し、西南戦争時に川尻鎮撫隊を組織した上田久兵衛（休）の関係史料である。既に幕末の京都政局に関わる主要史料が活字化されているが（宮地正人編『幕末京都の政局と朝廷』名著刊行会、2002年)、その全体像は不明であり、利用環境の整備と研究の深化が求められていた。

2023年度は「史料編纂所所蔵『熊本藩京都留守居上田久兵衛関係資料』の研究資源化」（研究代表者・今村直樹）が、引き続き本年度も「熊本藩士上田久兵衛の総合的研究と関係史料の学術資源化」（同）が、東京大学史料編纂所一般共同研究にそれぞれ採択された。これを受けて今村は、宮内庁書陵部の白石烈氏とともに、「上田久兵衛関係文書」の総目録作成・画像データ蓄積とともに、その共同研究を進めた。

本年度の作業の結果、将来的な上田家文書の利活用に向けた準備が概ね整うとともに、二年間の共同研究の成果を総括する講演会「熊本藩士上田久兵衛と幕末維新」（下記）を開催することができた。

9）紀要『永青文庫研究』第８号の刊行

本センターは、2017年度から研究紀要『永青文庫研究』を刊行している。本年度の第８号には、本センタースタッフ及び学外の研究者からの寄稿により、論文２本、書評１本を掲載することができた。

第８号の目次は以下の通りである。

論　　文

近世前期熊本藩の隣国密偵派遣
　―「村田門左衛門書上申覚」の背景― ……………………………… 後藤　典子

近世後期熊本藩の椎茸生産と周辺村
　―もう一つの「茸山騒動」― ………………………………………… 今村　直樹

書　　評

稲葉継陽著『近世領国社会形成史論』………………………………… 小西　　匠

10）公益財団法人永青文庫・熊本大学永青文庫研究センター編『織田信長文書の世界 永青文庫珠玉の60通』（勉誠社、2024年10月、全263 頁）の刊行

近世大名領国支配の体系＝藩政が確立する過程（16－17世紀）を百姓支配・地域支配の観点から明確化するという目標のもと、本年度は熊本大学永青文庫研究センター設立15周年記念「信長の手紙」展の開催を機会に、永青文庫所蔵織田信長発給文書群および関連文書群の研究に取り組んだ。その内容は、多くの研究者の協力を得て、公益財団法人永青文庫・熊本大学永青文庫研究センター編『織田信長文書の世界 永青文庫珠玉の60通』にまとめて刊行された。本書の構成は以下のとおりである。

はじめに　公益財団法人永青文庫理事長　細川護光
凡例
総論 珠玉の六〇通――織田信長文書の魅力　稲葉継陽
Ⅰ　永青文庫細川家の新発見文書と自筆文書
［論説］「室町幕府滅亡」の実像―新発見の信長書状をめぐって　稲葉継陽
［論説］細川藤孝への古今伝授―新発見の藤孝自筆書状をめぐって　稲葉継陽
［論説］織田信長の自筆書状　増田孝
［論説］光秀覚条々の執筆事情―「本能寺の変」をめぐる光秀と藤孝　稲葉継陽
Ⅱ　「室町幕府」をどうする？――信長・藤孝・義昭
［論説］織田信長の「天下」と「天下再興」　水野嶺
Ⅲ　一揆との戦と「長篠合戦」―信長の戦争と諸将
［論説］戦国時代の合戦と民衆　稲葉継陽
［論説］永青文庫の信長文書四通にみる長篠合戦　金子拓
Ⅳ　信長と藤孝、そして村重―奉仕と謀反のあいだ
［論説］荒木村重の謀反その歴史的意味　天野忠幸
Ⅴ　光秀の台頭から「本能寺の変」へ―信長・光秀・藤孝
［論説］織田政権末期における明智光秀の政治的位置　稲葉継陽
［論説］細川ガラシャ、若き日の肖像　山田貴司
Ⅵ　未完の「天下」を引き継ぐ者―秀吉と細川家
［論説］「再発見」された永青文庫所蔵『蜂須賀文書写』（「信長公御状写」）について　村井祐樹
［論説］藤孝家老・松井康之論　林千寿
［論説］山崎合戦の勝因　福島克彦
［論説］「花伝書抜書」紙背文書の石田三成自筆書状　林晃弘
Ⅶ　肥後細川家と信長文書―熊本への収集
［論説］細川家における光秀・信長らの鎮魂　稲葉継陽・有木芳隆
［論説］織田信長が文書に使用していた「紙」について　髙島晶彦
収録文書・美術工芸品目録
参考文献
関連地図

本書収録文書による略年表
細川家略系図
あとがき

新発見の信長書状を含む60通の信長発給文書のすべてについて、図版、翻刻文、現代語訳、解説を収録し、関連文書群および美術品とあわせて７つのテーマに分類、それぞれのテーマについて多くの研究を蓄積している方々から論稿を得て、永青文庫の信長文書群と織田政権期の政治史、および文書群の伝世等について、最新の知見を示すことができた。

11）シンポジウム「士族の『反乱』と廃藩後の地域ー佐賀、熊本、そして鹿児島ー」の開催

佐賀大学地域学歴史文化研究センター主催、本センター共催によるシンポジウムである。2025年２月15日に佐賀大学本庄キャンパス教養教育大講義室で開催された。参加者は83名であった。

廃藩置県後、領主や軍人としての地位を失った西南諸藩の士族たちは、地域のなかでいかなる模索を積み重ね、どのような社会を展望していたのか。旧藩社会の特質がどう廃藩置県後の士族社会へとつながり、それがどう士族反乱の性格を規定していたのか。本シンポジウムでは、佐賀・熊本・鹿児島の事例を比較する形で、この問題に迫ろうとした。

プログラム　13：00～17：15
趣旨説明
＜報告＞今村直樹（熊本大学永青文庫研究センター）
　「旧熊本藩の士族反乱と党派問題」
＜報告＞福元啓介（尚古集成館）
　「『窮士御救助』をめぐる藩政・県政の葛藤―困窮する鹿児島城下士の明治維新」
＜報告＞坂本卓也（佐賀大学地域学歴史文化研究センター）
　「佐賀の乱と科学技術―旧佐賀藩士の関わり―」
＜報告＞伊藤昭弘（佐賀大学地域学歴史文化研究センター）
　「明治初期佐賀における『団結』」
＜コメント＞丹羽謙治（鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター）

12）永青文庫細川家資料の重要文化財指定に向けた集中調査

本センターは、熊本大学寄託永青文庫細川家資料（約５万8,800点）の総目録を2015年に刊行した。このうち、『永青文庫叢書 細川家文書 中世編』（吉川弘文館、2010年）で紹介された信長発給文書をはじめとする中世文書266通は、2013年６月に国の重要文化財に指定された。しかし、それを除いた資料群の大部分は未指定である。そのため、近い将来の重要文化財指定に向けた永青文庫資料の集中調査（総目録と原資料との照合作業）が、文化庁の指導のもと、2022年度から始められた。

本年度の集中調査は、2024年８月（21日～23日）と2025年３月（17日～19日）の２度開催された。文化庁、公益財団法人永青文庫、熊本県文化課などの関係者が参加し、総目録の約5,000点分について、原資料との照合作業を終えることができた。

⑶　展覧会・講演会・社会貢献等

1）熊本大学永青文庫研究センター設立15周年記念「信長の手紙　珠玉の60通大公開」（永青文庫令和6年度秋季展 2024年10月5日～12月1日、主催：永青文庫、熊本大学永青文庫研究センター）

永青文庫が所蔵する細川家伝来の信長発給書状（朱印状、黒印状、自筆感状等）59通は、国の重要文化財に指定されているが、これほどの数が一所に伝来している例は他になく、直筆であることが確実な唯一の感状をも含む点で、質量ともに突出したコレクションといえる。さらに2022年には永青文庫の収蔵庫で新たに信長書状１通が発見され、コレクションはあわせて60通となった。

本展は、公益財団法人永青文庫との共催で、この60通の信長文書から、室町幕府の滅亡、一向一揆との死闘、長篠合戦、荒木村重謀反、明智光秀による本能寺の変など、信長の激動の10年間を、配下の細川藤孝らの動向とともに示した。

本展開催にあわせて、公益財団法人永青文庫・熊本大学永青文庫研究センター編『織田信長文書の世界 永青文庫珠玉の60通』（勉誠社、全263頁）を刊行して信長文書の全貌を書籍の形態（展覧会の図録機能も有する）でも示し、また、テレビ朝日系列の朝の情報番組「グッド！モーニング」で展覧会解説を３回にわたって放送するなど、広報に力を入れた。その結果、約１万人の入館者を得て、『織田信長文書の世界』は会場等にて1,400冊以上を売り上げげた。

現代人の多くが抱く信長のイメージを相対化する、歴史資料から迫る真の信長像を発信する展覧会とすることができた。なお会期中の記念講演として、日本女子大新泉山館（東京都文京区目白台）にて稲葉継陽「信長・藤孝・光秀―「室町幕府の滅亡」と「本能寺の変」―」がなされた。

２）第39回　熊本大学附属図書館貴重資料展「小楠に届いた手紙―横井小楠文書にみる幕末群像―」（2024年11月2日～11月4日、附属図書館と共催、於熊本大学附属図書館）

３）第18回　永青文庫セミナー
（2024年11月3日、附属図書館と共催、於熊本大学附属図書館）
講演１　今村直樹（熊本大学永青文庫研究センター）
「横井小楠の人脈と思想形成過程」
講演２　三澤純（熊本大学大学院人文社会科学研究部）
「『他の非をのみ唱え修行怠り候は士君子の恥ずべき事なり』―父としての横井小楠―」

本年度の貴重資料展は、本センタースタッフの協力のもと、三澤純兼任教員および今村直樹専任教員が担当した。

2023年１月、幕末維新期を代表する思想家・儒学者である横井小楠の関係文書「横井小楠文書」が、ご子孫の赤松秋雄氏から本学に寄贈された。ここに、「横井小楠文書」の大部分が本学に収蔵され、研究者の閲覧に供されることとなり、赤松氏には2024年１月、紺綬褒章が授与

された。本資料展は、これを記念して開催された。

「横井小楠文書」の特徴の一つは、肥後実学党の同志であった米田是容（長岡監物、熊本藩家老）や立花壱岐（柳川藩家老）をはじめ、森有礼（薩摩藩出身、初代文部大臣）、福岡孝弟（土佐藩出身、明治新政府では「五箇条の誓文」の作成に関わった人物）等、幕末の著名人が小楠宛に送った書簡が多数含まれている点にある。本資料展では、こうした「来簡」に注目することで、小楠が形成した壮大な人脈の一端を明らかにしようとした。

貴重資料展の入場者数は418名、永青文庫セミナーの来聴者は141名であり、大変盛況であった。

４）講演会「熊本藩士上田久兵衛と幕末維新」の開催

本講演会は、東京大学史料編纂所および本センター等の主催により、2025年３月８日に熊本大学文法学部本館で開催したものである。2023年度から２年間進めてきた東京大学所蔵「上田久兵衛関係文書」の共同研究の内容を、ひろく社会に還元するために企画された。

熊本藩の京都留守居として幕末期の京都政局で活躍し、西南戦争では戦時下の治安維持のために川尻鎮撫隊を組織したにもかかわらず、政府軍により処刑された熊本藩士上田久兵衛（休）は、幕末維新の激動を象徴する人物の一人である。しかし、彼の名前は、今や地元の熊本でも十分に知られておらず、とくに西南戦争から150年を迎えようとする現在、史実に基づく再評価が求められている。

本講演会では、「上田久兵衛関係文書」および熊本の関連史料から浮かび上がった新知見をもとに、知られざる一武士の視点から幕末維新史をとらえ直そうとした。プログラムは以下の通りである。

プログラム　13：00－16：30

・開会挨拶　……………………………………　尾上陽介（東京大学史料編纂所 所長）

・趣旨説明

・上田久兵衛関係文書と幕末維新史研究

　　……………………………………………　箱石　大（東京大学史料編纂所）

・肥後藩京都留守居上田久兵衛の国事周旋活動

　　―“いま一度、日本を立て直しもうすべし”―

　　……………………………………………　白石　烈（宮内庁書陵部）

・明治維新後の上田休―廃藩置県・細川家・西南戦争―

　　……………………………………………　今村直樹（熊本大学永青文庫研究センター）

会場での対面参加者・オンラインでの参加者合わせて約130名の参加者を得ることができ、多くの質問が寄せられるなど盛況であった。

５）熊本大学広報戦略室を通じた研究成果の記者発表

本センターは最新の研究成果を発信する手段として、熊本大学広報戦略室を通じたマスコミへの公式発表と熊本大学 HP への掲載、対面での記者発表を実施している。本年度は、以下の２件を発表することができた。

①ニュースリリース

「熊本大学と TOPPAN、くずし字 AI-OCR を活用した古文書の大規模調査のための独自手法を開発」（TOPPAN 株式会社と共同リリース、2024年７月26日）

②記者発表

「室町幕府滅亡約１年前の織田信長書状を発見、細川藤孝にすがる信長「あなただけが頼りです」」（公益財団法人永青文庫と共同発表、2024年９月６日　於文部科学省）

①と②の発表内容は本年報の巻末に収録しているが、いずれも全国各紙やテレビ、それにWEB ニュース等で報道され、反響を呼んだ。

特に②は、東京の永青文庫における所蔵品調査で新たに発見された信長文書の歴史的意味を発信し、それを永青文庫での「信長の手紙」展の周知につなげることができた点で、大きな意義をもつことになった。

なお、2025年３月21日には、記者発表「永青文庫が熊本大学に寄託している貴重資料のうち新たに9,346点が国の重要文化財に」を実施した。

６）テレビ企画、地元紙への執筆等、マスコミとの連携

NHK E テレ「先人たちの底力 知恵泉」、NHK BS「英雄たちの選択」、地元紙『熊本日日新聞』への寄稿や連載などを通じて、本センターの基礎研究の成果を随時発信した。今後も取り組みを継続したい。

(4)　センターの運営資金

本年度の永青文庫研究センターの運営資金は、主に以下の事業費等によった。

①　熊本大学 概算要求機能強化促進分プロジェクト経費「熊本藩大名家資料群の総合的分析による日本近世史研究拠点・歴史文化情報発信拠点の発展」

②　日本学術振興会 科学研究費補助金基盤研究（B）

③　日本学術振興会 科学研究費補助金基盤研究（C）

④　熊本県永青文庫常設展示振興基

３．個人年間活動

稲葉継陽

共編著

公益財団法人永青文庫・熊本大学永青文庫研究センター編『織田信長文書の世界 永青文庫珠玉の60通』（勉誠社、2024年10月、全263 頁）

論文

大澤留次郎・福井尚子・稲葉継陽・後藤典子・國島圭・河津光晟・岡田崇「くずし字 AI-OCR による「細川家文書」の翻刻と全文検索システムの構築」（『人文科学とコンピュータシンポジウム2024論文集　MLA をつなぐデジタルアーカイブ』一般社団法人情報処理学会、2024年11月、99～104頁）

学会発表

2024年７月28日　中世地下文書研究会（会場：立教大学）
　タイトル「春田直紀編『列島の中世地下文書』書評　「肥後」の「地下文書」と「地下社会」」（立教大学）

2024年12月７日　情報処理学会・人文科学とコンピュータ研究会主催「人文科学とコンピュータシンポジウム　MLA をつなぐデジタルアーカイブ」（会場：東北大学川内キャンパス）
　タイトル「くずし字 AI-OCR による「細川家文書」の翻刻と全文検索システムの構築」（大澤留次郎・福井尚子・後藤典子・國島圭・河津光晟・岡田崇との共同発表）

学術的著述

稲葉継陽「解説」（藤木久志『増補 戦国史をみる目』法蔵館文庫、2024年７月、421－429頁）

（雑誌連載）

稲葉継陽「永青文庫　歴史万華鏡」（109）～（120）（『阿蘇』1093－1104号、2024年４月－2025年３月）

（新聞連載）

稲葉継陽「細川キリシタン群像」（16）～（21）（『熊本日日新聞』2024年４月－2024年９月）

（新聞寄稿）

稲葉継陽「権力者の光と影映す60通「信長の手紙」展に寄せて」（『熊本日日新聞』2024年11月13日）

開催セミナー、シンポジウム、展覧会

2024年10月５日～12月１日　永青文庫令和６年度秋季展　信長の手紙─珠玉の60通大公開─
　主催：公益財団法人永青文庫・熊本大学永青文庫研究センター

その他（外部委員、社会貢献等）

（外部委員）

人吉市指定文化財等保存活用専門会議（人吉城跡部会）専門指導員、佐敷城跡調査検討委員（芦北町）、宇土城跡調査検討委員、菊之城史跡調査検討委員（菊池市）、国史跡棚底城跡整

備検討委員（天草市）、八代市立博物館未来の森ミュージアム協議会委員、国史跡陣内城跡整備検討委員（甲佐町）、高森町史執筆委員、永青文庫常設展示振興基金運営委員（熊本県教育庁文化課）、熊本県文化財保護審議委員、熊本県文化振興審議会委員、放送大学熊本学習センター客員教授

（講演）

2023年４月18日　熊杏会（熊本大学医学部同窓会）北里柴三郎顕彰2024年事業　第２回講演会
　タイトル「細川藩政における公共医療行政の萌芽とその担い手」
　会場：熊本大学医学部奥窪記念ホール

2024年６月30日　放送大学熊本学習センター公開講演会
　タイトル「永青文庫の織田信長文書―珠玉の59通―」
　会場：放送大学熊本学習センター

2023年７月５日　熊本さわやか大学校大学院
　タイトル「「天草四郎」と島原・天草一揆」
　会場：熊本県総合福祉センター

2024年７月25日「菊池氏遺跡」国指定記念シンポジウム　鼓動する菊池氏の歴史（菊池市教育委員会主催）
　タイトル「菊池氏の歴史的役割とその拠点―文献史料の検討から―」
　会場：菊池市泗水ホール

2024年10月20日　文化講演会 宇城第５回講演会
　タイトル「竹崎季長と豊福城合戦―鎌倉・戦国時代の宇城―」
　会場：ウイングまつばせ

2024年11月２日　2024年永青文庫秋期展「信長の手紙」記念講演会
　タイトル「信長・藤孝・光秀―「室町幕府の滅亡」と「本能寺の変」―」
　会場：日本女子大学　新泉山館

2024年11月16日　第124回九州医師会総会・医学会　特別講演Ⅱ
　タイトル「織田信長研究の最前線―「室町幕府の滅亡」と「本能寺の変―」
　会場：ホテル日航熊本

2024年11月24日　放送大学「どこでも生涯学習」公開講演会2024　永青文庫「信長の手紙」
　タイトル「織田信長・細川藤孝・明智光秀―「室町幕府の滅亡」と「本能寺の変」」
　会場：熊本大学工学部百周年記念館

2024年11月30日「TEAM EXPO 2025」プログラム共創パートナーイベント―日本文化の継承と魅力発信プロジェクト―（熊本城ミュージアムわくわく座・TOPPAN ホールディングス株式会）
　タイトル「「細川家文書」から読み解く江戸時代の熊本城―災害復興とくらし―」（後藤典子と共演）
　会場：熊本城ミュージアムわくわく座

2025年１月11日　物集女城跡 国史跡指定記念シンポジウム（向日市教育委員会主催）

タイトル　「近世大名細川家の成立と西岡」

会場：永守重信市民会館ホール

2025年２月１日　令和６年度 水俣環境アカデミア市民公開講座

タイトル「江戸時代 水俣鉄砲隊の役割とそのルーツ―「天下泰平」の実現と水俣―」

会場：水俣環境アカデミア

2025年３月15日　里山ギャラリー講座　永青文庫研究の最前線

タイトル　「戦国合戦の実態と豊臣政権」

会場：肥後銀行本店２階大会議室

（記者発表）

2024年９月６日

「室町幕府滅亡約１年前の織田信長書状を発見、細川藤孝にすがる信長「あなただけが頼りです」」（熊本大学・公益財団法人永青文庫の共同発表）

発表会場：文部科学省

（テレビ・ラジオ出演）

2024年５月６日　NHKBS「英雄たちの選択　スペシャル日本史サバイバル！　近衛家と細川家の戦略」

2024年８月22日　NHK クマロク！「くずし字」を AI で解読

2024年８月　TBS ラジオ「くずし字」AI

2024年９月６日　各局 記者発表「室町幕府滅亡約１年前の織田信長書状を発見」

2024年11月11日　テレビ朝日「グッド！モーニング」「信長の手紙」展覧会解説①

2024年11月19日　テレビ朝日「グッド！モーニング」「信長の手紙」展覧会解説②

2024年11月25日　テレビ朝日「グッド！モーニング」「信長の手紙」展覧会解説③

2025年１月21日　NHKE テレ「先人たちの底力 知恵泉」細川幽斎　ピンチ連続の人生！その回避法とは⁉

今村直樹

論文

今村直樹「近世後期熊本藩の椎茸生産と周辺村―もう一つの『茸山騒動』―」（『永青文庫研究』８、2025年３月、27－46頁）

学会発表

2024年４月13日　明治維新史学会例会　オンライン

タイトル　「旧藩主家の西南戦争―細川護久を事例に―」

2024年６月１日　熊本史学会春季研究発表大会　くまもと県民交流館パレア

タイトル　「細川家歴代当主甲冑の『発見』―被災文化財研究の可能性―」

2024年６月９日　第54回明治維新史学会大会　武蔵野大学有明キャンパス

タイトル　「旧藩主家の西南戦争―細川護久を事例に―」

2024年８月24日　愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター・細川家文書「口書」科研合同研究会　愛媛大学城北キャンパス

タイトル　「近世後期の百姓的世界と藩権力―細川家文書「口書」を素材に―」

2024年９月14日　熊本近代史研究会９月例会　熊本市民会館

タイトル　「旧藩主家の西南戦争―細川護久を事例に―」

2025年２月15日　第14回地域学シンポジウム「士族の『反乱』と廃藩後の地域」　佐賀大学本庄キャンパス

タイトル　「旧熊本藩の士族反乱と党派問題」

学術的著述

（講演録）

今村直樹「通潤橋の建設過程と領国地域社会―熊本藩政の特質―」（『国宝になった「通潤橋」ものがたり』細川文化研究会・出水神社、2024年８月、5－21頁）

（展覧会解説目録）

今村直樹・三澤純編『第39回　熊本大学附属図書館貴重資料展　解説目録　小楠に届いた手紙―横井小楠文書にみる幕末群像―』（熊本大学附属図書館、2024年10月、全34頁）

（書評）

今村直樹「書評　松沢裕作著『日本近代村落の起源』」（『社会経済史学』90－2、2024年８月、147－152頁）

（史料解説）

今村直樹「松井家文書にみる『島原大変肥後迷惑』」（『日本歴史』916、2024年９月、71－73頁）

（報告要旨）

今村直樹「細川家歴代当主甲冑の『発見』―被災文化財研究の可能性―」（『地方史研究』74－6、2024年12月、38－40頁）

（連載記事）

今村直樹「熊本大学キャンパスミュージアムへの招待⑥　永青文庫研究センター」（『文部科学教育通信』582、2024年６月24日、２頁）

今村直樹「熊本大学キャンパスミュージアムへの招待⑦　永青文庫細川家資料」（『文部科学教育通信』583、2024年７月８日、２頁）

今村直樹「熊本大学キャンパスミュージアムへの招待⑧　松井家文書」（『文部科学教育通信』584、2024年７月22日、２頁）

開催セミナー、展覧会、シンポジウム、講演会

2024年11月２～４日

第39回熊本大学附属図書館貴重資料展「小楠に届いた手紙―横井小楠文書にみる幕末群像―」

主催：熊本大学附属図書館・熊本大学永青文庫研究センター

2024年11月３日　第18回永青文庫セミナー

主催：熊本大学附属図書館・熊本大学永青文庫研究センター

2025年２月15日　第14回地域学シンポジウム「士族の『反乱』と廃藩後の地域」

主催：佐賀大学地域学歴史文化研究センター

共催：熊本大学永青文庫研究センター

2025年３月８日　講演会「熊本藩士上田久兵衛と幕末維新」

主催：熊本大学永青文庫研究センター・東京大学史料編纂所・東京大学史料編纂所2024年度一般共同研究「熊本藩士上田久兵衛の総合的研究と関係史料の学術資源化」

その他（受賞、外部委員、社会貢献等）

（外部委員）

熊本県立美術館収集委員会委員、宇土市轟泉水道及び旧高月邸保存活用検討会委員、宇土市歴史的資料保存活用事業運営委員会委員、菊陽町文化財保護委員、高森町史編纂委員、高知県史編さん専門部会（近世部会）委員、島根県古代文化センター客員研究員、放送大学非常勤講師

（講演）

2024年７月６日　地域文化講座「地域の歴史を学ぶ」　高知城歴史博物館

タイトル　「日本近世・近代の村とその特質」

2024年10月３日　熊本さわやか大学校　熊本県総合福祉センター

タイトル　「熊本藩の手永・惣庄屋制と地域社会」

2024年10月26日　通潤橋“国宝”指定記念講演会　矢部保健福祉センター千寿苑

タイトル　「通潤橋を生んだ熊本藩政と地域社会」

2024年12月３日　熊本さわやか大学校　桜十字ホールやつしろ

タイトル　「熊本藩の手永・惣庄屋制と地域社会」

2025年２月７日　くまもと彩発見観光講座　熊本大学五高記念館

タイトル　「五高成立前史―秋月胤永・熊本藩・細川家―」

2025年２月23日　令和６年度「咸宜園の日」記念講演会　パトリア日田

タイトル　「明治維新史のなかの北里柴三郎」

2025年３月８日　講演会「熊本藩士上田久兵衛と幕末維新」　熊本大学

タイトル　「明治維新後の上田休―廃藩置県・細川家・西南戦争―」

2025年３月22日　里山ギャラリー講座「永青文庫研究の最前線」　肥後銀行本店ビル

タイトル　「士族反乱と旧熊本藩主細川家」

後藤典子

論文

大澤留次郎・福井尚子・稲葉継陽・後藤典子・國島圭・河津光晟・岡田崇「くずし字 AI-OCR による「細川家文書」の翻刻と全文検索システムの構築」（『人文科学とコンピュータシンポジウム2024論文集　MLA をつなぐデジタルアーカイブ』一般社団法人情報処理学会、2024年11月、99～104頁）

後藤典子「近世前期熊本藩の隣国密偵派遣―「村田門左衛門書上申覚」の背景―」（『永青文庫研究』８、2025年３月、１～26頁）

学会発表

2024年12月７日　情報処理学会・人文科学とコンピュータ研究会主催「人文科学とコンピュータシンポジウム　MLA をつなぐデジタルアーカイブ」（会場：東北大学川内キャンパス）

タイトル　「くずし字 AI-OCR による「細川家文書」の翻刻と全文検索システムの構築」（大澤留次郎・福井尚子・稲葉継陽・國島圭・河津光晟・岡田崇との共同発表）

講演

2024年11月30日　「TEAM EXPO 2025」プログラム共創パートナーイベント―日本文化の継承と魅力発信プロジェクト―（熊本城ミュージアムわくわく座・TOPPAN ホールディングス株式会）

タイトル　「「細川家文書」から読み解く江戸時代の熊本城―災害復興とくらし―」（稲葉継陽と共演）

会場：熊本城ミュージアムわくわく座

日高愛子

論文

・「細川就の蒐書活動」（『国語国文学研究』第56号、2025年３月）

研究発表

・「東アジアにおける文化表象としての端午節と菖蒲」東アジア日本研究者協議会第８回国際学術大会、2024年11月９日、淡江大学（台湾）

・「細川就の蒐書をめぐって」第70回古典研究会、2023年12月23日、福岡大学

講演

・「細川家の古典学―源氏物語と和歌―」里山ギャラリー講座・永青文庫研究の最前線、2024年５月25日、肥後の里山ギャラリー

・「平安文学にみる恋愛と結婚」2024年11月11日、淡江大学（台湾）

・「古典を愛した姫君―細川就と『源氏物語』」熊大まちなかキャンパストークイベント、2024年12月21日、蔦屋書店熊本三年坂

三澤　純

各種委員会

熊本市町界町名審議会委員長、くまもと文学・歴史館協議会委員、御船町文化財保護　委員、熊本県高等学校生徒地歴・公民科研究発表大会審査員

講演

・「他の非をのみ唱え我が修行怠り候は士君子の恥ずべき事なり―父としての横井小楠―」、第39回熊本大学附属図書館貴重資料展公開講演会（第18回永青文庫セミナー）、2024年11月３日、於熊本大学ひご未来図書館（中央館）

・「『公文類纂』がつなぐ日本の近世と近代―行旅難渋者関係史料を中心として―」、くまもと

文学・歴史館主催「シンポジウム熊本県庁文書が照らす明治日本—「公文類纂」の魅力—」、2025年２月23日、於熊本県立図書館大研修室

４．ニュースリリース・記者発表要旨

⑴ ニュースリリース
熊本大学と TOPPAN、くずし字 AI-OCR を活用した古文書の大規模調査のための独自手法を開発

⑵ 記者発表資料
室町幕府滅亡約１年前の織田信長書状を発見　細川藤孝にすがる信長「あなただけが頼りです」

⑶ 記者発表資料
永青文庫が熊本大学に寄託している貴重資料のうち新たに9,346点が国の重要文化財に

報道発表資料

熊本大学 Kumamoto University　TOPPAN

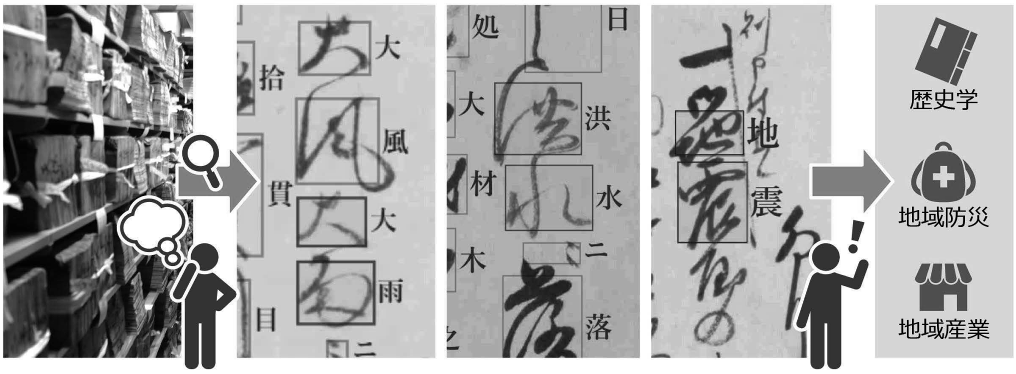
2024 年 7 月 26 日
国立大学法人 熊本大学
TOPPAN 株式会社

熊本大学と TOPPAN、くずし字 AI-OCR を活用した
古文書の大規模調査のための独自手法を開発

永青文庫所蔵の『細川家文書』における未解読の古文書約 5 万枚を、くずし字 AI-OCR を用い短期間で全文テキスト化に成功。文献資料の大規模調査のための独自手法を確立するとともに、新しく発見された災害関連の記録を用い、現代の防災計画への活用を目指す

国立大学法人 熊本大学(所在地:熊本県熊本市、学長:小川久雄、以下熊本大学)と TOPPAN ホールディングスのグループ会社である TOPPAN 株式会社(本社:東京都文京区、代表取締役社長:齊藤昌典、以下 TOPPAN)は、熊本大学が公益財団法人永青文庫から寄託を受けている歴史資料『細川家文書(ほそかわけもんじょ)』のうち、専門家でも解読が困難な難易度の高いくずし字で書かれた約 5 万枚の未解読の古文書(藩政記録)を AI-OCR を用いて短期間で解読し、約 950 万文字のテキストデータを生成することに成功しました。

さらに、くずし字資料の解読システムと連動するキーワード検索システムを構築することにより、江戸時代前期の細川藩領国(小倉領 40 万石から熊本領 54 万石)の、約 90 年間にわたるあらゆる社会的事件や統治制度の変容を示す記述を含んだ資料を即時に検索収集できるようになりました。



大量のくずし字資料を AI-OCR でテキスト化し、検索可能にすることで様々な分野の研究等への活用が可能に

今回解読した古文書は、『細川家文書』のうち、細川家奉行所の執務記録である「奉行所日帳(ぶぎょうしょにっちょう)」、藩主細川忠利の口頭での命令を日次に記録した「奉書(ほうしょ)」、参勤中の細川藩主が国元の家老・奉行衆に発した書状の控えである「御国御書案文(おくにごしょあんもん)」、小倉・熊本の惣奉行衆から各業務を担当する奉行たちへ発せられた指示書類の控えである「方々(かたがた)への状控(じょうひかえ)」など、合計約 5 万枚です。

また、くずし字 **AI-OCR** により作成したテキストデータに対して、今回「地震、大雨、洪水、虫、飢、疫」などの災害に関連するキーワードで検索・調査を実施したところ 300 件以上の記述を発見しました。その中には、知られざる自然災害、疫病流行や飢饉など、歴史学・地域防災研究において重要な資料も含まれます。

今後、熊本大学と TOPPAN は、『細川家文書』の解読と分析を進め、江戸時代の社会史研究の通時的深化に貢献するとともに、新しく発見された災害関連の記録を活用することで、現代における防災意識の醸成、防災計画の策定等にも活用を目指します。

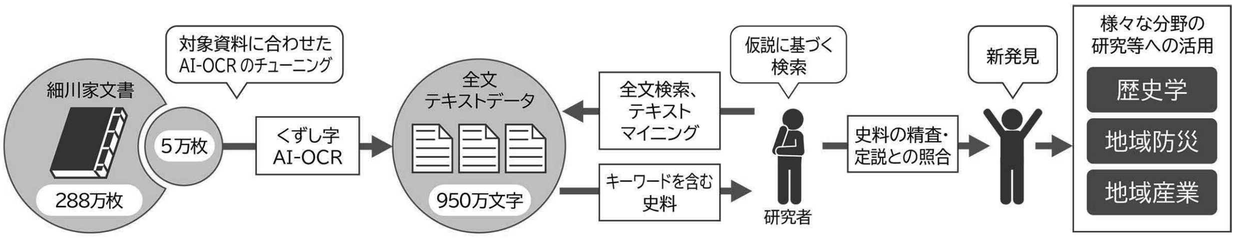
■ 取り組みの背景

古文書は、日本国内に数十億点以上残存すると言われていますが、そのなかには現代の社会課題にも直結する災害や地域文化の記録など、防災や観光資源の創出・地域の活性化にもつながる貴重な情報が記されているものがあります。しかし、古文書のほとんどは「くずし字」で書かれているため現代人にとって判読が困難となってしまい、当時の記録・文献を活用する際の大きな障壁になっています。

TOPPAN は、これらの課題を解決する新たな手法として、2015 年より大学共同利用機関法人人間文化研究機構　国文学研究資料館との共同研究を開始し、以後、多数の研究機関等とくずし字 AI-OCR 技術の開発・実証を重ねてきました。2017 年からは古文書解読とくずし字資料の利活用サービス「ふみのは®」として、様々なくずし字解読ソリューションを提供しています。

熊本大学は、公益財団法人永青文庫が所有する、九州の国持大名・肥後細川家（1600～1632 年 小倉藩主、以降 1871 年まで熊本藩主）に伝来した歴史資料や美術品のうち、約 5 万 7,000 点、約 288 万枚を寄託されています。寄託資料の中でも、今回解読した「奉行所日帳」をはじめとした、17 世紀初期から後期にかけて奉行所に蓄積された大量の統治記録は、当該時期の九州地域の社会状況を知る上でもきわめて貴重な歴史資料です。熊本大学では 2010 年に熊本大学永青文庫研究センターを設置し、永青文庫から寄託されている歴史資料や書籍等の基礎研究を推進して、ひろく社会に発信しています。

このような中熊本大学と TOPPAN は、2021 年より文献資料の新たな大規模調査手法の検討と、永青文庫所蔵資料に対する AI-OCR の精度向上に取り組んでおり、文部科学省における 2023 年度の科学研究費助成事業において『永青文庫資料と「くずし字 AI-OCR」の活用による 17 世紀社会論・公儀権力形成史の再構築』として採択されました。このたび約 5 万枚・約 950 万文字を全文テキスト化し、大規模な古文書解読のためのシステム構築を行うとともに、地域における災害記録をはじめとした網羅的な調査を開始しました。

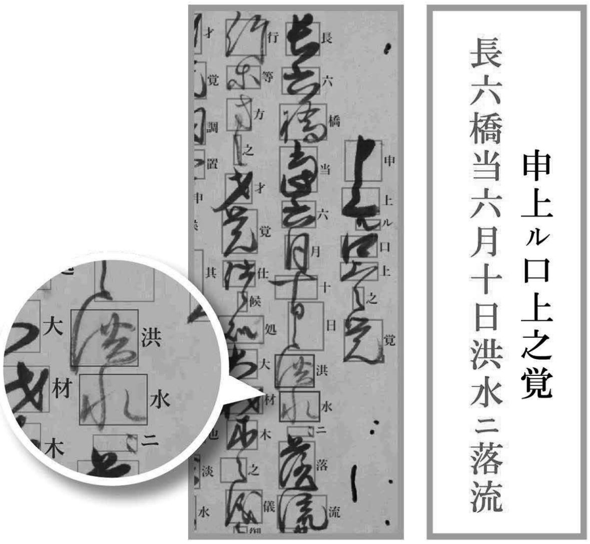


くずし字文献資料の大規模調査のフロー図

くずし字 AI-OCR による解読と検索システムが一体になることによって、これまでくずし字の解読が障壁となっていた古文書などの一次史料への網羅的調査が容易になります。検索により発見した資料を研究者が精査し、先行研究や定説との照合を行うことで、新たな発見や、歴史学をはじめとした様々な分野への一次史料の活用を促進します。

今回解読した『細川家文書』の約 5 万枚の資料に対し、災害に関するキーワード「大雨、虫、飢、疫」などで調査したところ、洪水、作物虫害、飢饉、疫病の発生と、それへの対応が行政課題化した事実を示す記述などを、300 件以上発見しました。

また、それらの中には、いままでよく知られていなかった 17 世紀後期の気象災害に起因する大規模な飢饉と疫病の蔓延を物語る熊本藩奉行所の執務記録の記述など、未知の重要な記述が含まれることが確認され、熊本における地域防災などに今後活用するための研究を進めていきます。



「奉行所日帳」に含まれる「洪水」の記述 67 件の中から
正徳2年（1712）旧暦 6 月 10 日の洪水で、熊本町の「長六橋」が流された記録を発見

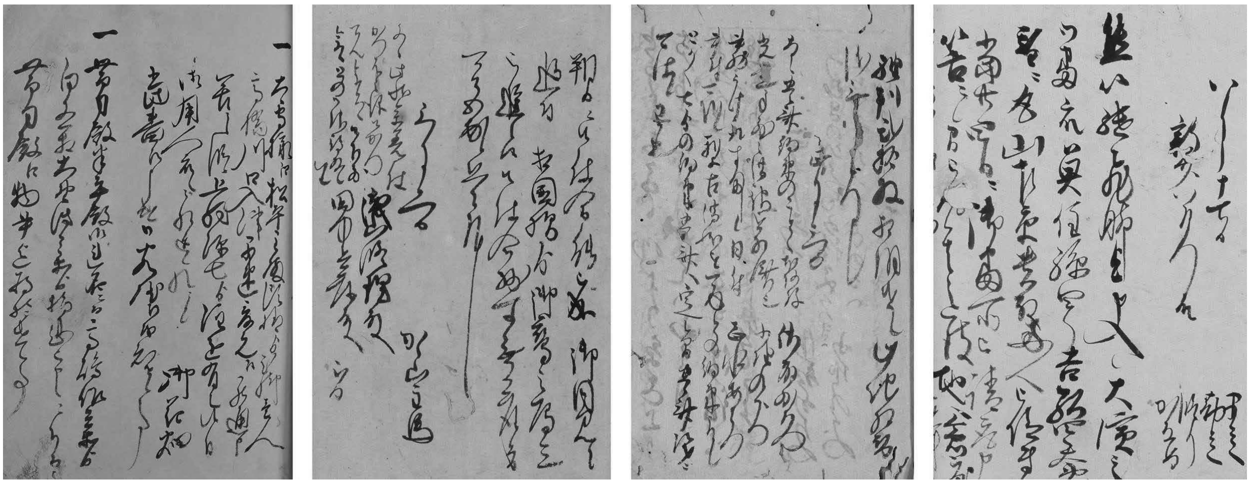
■ 両者の役割について

熊本大学：研究計画、史料選定、処理結果の評価、応用研究検討
TOPPAN：プロジェクトの管理・実行、くずし字 AI-OCR および解読システムの開発

■ 『細川家文書』について

『細川家文書』は、江戸時代に小倉藩主・熊本藩主をつとめた近世大名細川家に伝来した 5 万点以上、約 288 万枚の歴史資料群です。現在は公益財団法人永青文庫が所有し、その大半が熊本大学に寄託されています。『細川家文書』の資料群は主に以下の通りです。

① 「奉行所日帳（ぶぎょうしょにっちょう）」：小倉城や熊本城にあった細川家奉行所の日次の執務記録であり、当該時期の九州地域の社会状況が記された貴重な歴史資料
② 「奉書（ほうしょ）」：藩主細川忠利が、側近を通して口頭で命令した内容を日次で書きとめた記録
③ 「御国御書案文（おくにごしょあんもん）」：参勤中の細川忠利が国元の家老・奉行衆に発した書状の写し（案文）を集成したもの
④ 「方々（かたがた）への状控（じょうひかえ）」：小倉・熊本の惣奉行衆から各業務を担当する奉行たちへ発せられた書状の写しを集成したもの



左から、「奉行所日帳」、「奉書」、「御国御書案文」、「方々への状控」

■ 今後の展開について

今後、熊本大学および TOPPAN は、共同で『細川家文書』を解読し、当研究を通じて現代における防災計画や、歴史学の学習・研究の拡大に貢献します。

熊本大学は、『細川家文書』の解読と分析を進め、一時代の中でも細分化された短期間の枠内で完結するような研究法を克服して、江戸時代の長期にわたる社会変容の過程を通時的に把握し、九州に基点をすえた江戸時代社会史研究の深化に取り組んでいきます。

また、TOPPAN はグループ会社である TOPPAN デジタル、TOPPAN エッジとも連携し、AI-OCR による古文書解読支援システム「ふみのは®」の精度向上を目指すとともに、全国の様々な教育機関、博物館・資料館、地方自治体などと提携し、全国各地に眠る貴重な歴史的資料の研究・活用の支援に取り組んでいきます。

■ 熊本大学永青文庫研究センターについて

熊本大学永青文庫研究センターは、永青文庫資料をはじめとする熊本藩関係資料の総合的な研究を通じて当該資料に立脚した 拠点的研究を組織するとともに、文化行政機関等との連携によって地域文化振興に貢献し、もって熊本大学の教育、研究及び 社会貢献活動の充実発展に寄与することを目的として設立された研究組織です。

https://eisei.kumamoto-u.ac.jp/

■ TOPPAN グループについて

TOPPAN ホールディングスを持株会社とする TOPPAN グループは「印刷テクノロジー」をベースに「情報コミュニケーション」「生活・産業」「エレクトロニクス」の 3 分野で事業を展開しており、社会やお客さまの課題解決につながるトータルソリューションの提供を行っています。

・TOPPAN ホールディングス株式会社：https://www.holdings.toppan.com/ja/
・TOPPAN 株式会社：https://www.toppan.com/ja/

・「ふみのは®」について

「ふみのは®」は、古文書などのくずし字資料をデータ化し、解読をアシストする各種サービスの総称です。TOPPAN グループの培ってきた OCR 技術（自動文字認識）を活用し、くずし字の資料の解読や公開をサポートしています。

https://www.toppan.com/ja/joho/fuminoha/

・「くずし字 AI-OCR」技術について

OCR(Optical Character Recognition)とは光学文字認識のことで、文書画像に含まれる文字を読み取り、テキストデータに変換するソフトウェアの総称です。TOPPAN グループでは 2013 年から高い精度のテキストデータを提供する「高精度全文テキスト化サービス」を展開してきました。今回の取り組みで利用したくずし字 AI-OCR エンジンは TOPPAN デジタル株式会社にて独自に研究・開発しているもので、一つひとつの文字位置を認識できることを特長としています。そのため利用者はくずし字のような難読文字であっても、解読結果を古文書と照らし合わせながら読むことが可能です。

＜熊本大学教授、永青文庫研究センター　稲葉継陽センター長のコメント＞

世界史上の「近世」と呼ばれる時代において、日本ほど多くの文書が作成された地域は他にないといわれます。しかしこれまでは、独特の草書体で書かれた大量の近世文書から情報(キーワード)を引き出すには、それらを人力で解読して文字データ化する必要があり、必然的に膨大な時間を必要とするため、処理可能なデータ量が限られて、研究推進の大きな壁になっていました。

今次の「くずし字 AI-OCR」技術によって、この壁が取り払われ、文書の画像データさえ揃えれば、江戸時代の社会の長期にわたる変容の過程を把握することに道が開かれ、また長期にわたる地震や気象災害、さらに疫病(パンデミック)の発生傾向を瞬時に把握することが可能となります。

研究の飛躍的な発展が展望できるとともに、膨大な古文書の読み手が足りない地方文化財行政の現場にとっても、きわめて有益な新技術となるでしょう。

＜公益財団法人永青文庫　細川護光理事長のコメント＞

永青文庫には、大名細川家に蓄積された室町時代以来の史料が伝来しています。信長や秀吉をはじめとする天下人から受給した文書群は、すでに国重要文化財に指定されていて、ひろく知られていますが、近世藩政史料群は、なにぶん分量が膨大で、文字のくずし方も時代や書き手によって多様であるため、いまだごく一部分が利用されているに過ぎません。この「くずし字　AI-OCR」技術の発達には目をみはるものがあり、藩政史料の内容が学界さらに社会で本格的に活用される呼び水となることを期待します。

以　上

＊「ふみのは」は、TOPPAN ホールディングス株式会社の登録商標です。

＊ 本ニュースリリースに記載された会社名および商品・サービス名は各社の商標または登録商標です。

＊ 本ニュースリリースに記載された内容は発表日現在のものです。その後予告なしに変更されることがあります。

情報解禁日：2024 年 9 月 6 日（金）15 時

熊本大学 Kumamoto University　細川コレクション 永青文庫 EISEI BUNKO MUSEUM

令和６年８月２１日

報道機関　各位

【記者発表のご案内】

室町幕府滅亡約 1 年前の織田信長書状を発見
細川藤孝にすがる信長「あなただけが頼りです」

（ポイント）

- 公益財団法人永青文庫（東京都文京区：以下「永青文庫」）には、細川藤孝（1534—1610）を初代とする大名肥後細川家に伝来した数多くの重宝が保管されています。なかでも、織田信長（1534—1582）の発給文書 59 通はとくに貴重なもので、すべてが国の重要文化財に指定されています。ひとところに伝来する数としては比類がなく、内容も重要なものが多いため、これまで多くの研究者に注目されてきました。
- 2022 年、永青文庫と熊本大学永青文庫研究センターとの共同調査によって、永青文庫の収蔵庫から、60 通目の信長発給文書が発見されました。慎重に検討を重ねたところ、信長が、いわゆる「室町幕府の滅亡」（将軍足利義昭（1537—1597）の京都没落）の前年にあたる元亀 3 年（1572）の 8 月 15 日に、藤孝に出した未知の書状であることがわかりました。
- 本書状には、元亀 4 年（1573）7 月における義昭の京都没落の背景に関わる貴重な情報が含まれています。信長が足利義昭とともに構築した幕府体制がわずか 5 年後に崩壊した主な要因が、義昭側近衆と信長との対立にあったこと。側近衆の中にあって細川藤孝ただ一人が信長と通じ、義昭挙兵の半年も前から畿内の領主層を信長方に組織する活動を続けていたこと、などです。幕府政治が混迷を極める中、まさに藤孝は、信長の京都における頼みの綱でした。
- 義昭の側近中の側近として義昭と信長を結び付けた細川藤孝が、「室町幕府の滅亡」を実現させるキーマンともなったのです。新発見の信長書状によって、信長の権力のあり方を大きく左右した藤孝の存在がクローズアップされます。

（概要説明）

1. 2022 年、細川藤孝を初代とする大名細川家に伝来した歴史資料等を所有する公益財団法人永青文庫と、熊本大学永青文庫研究センターは、東京都文京区目白台にある永青文庫収蔵庫の歴史資料を共同で調査し、未知の 8 月 15 日付け細川藤孝宛織田信長書状 1 点を発見しました。永青文庫 60 通目の信長発給文書の発見でした。

   検討の結果、この書状の年代は元亀 3 年（1572）、「室町幕府の滅亡」（将軍足利義昭の京都没落）の約 1 年前に書かれたものと断定されました。

   信長は藤孝にこう伝えています。

   「今年は「京衆」（義昭奉公衆）の誰一人として手紙や贈物をよこさないのですが、その中にあってあなたからは、初春にも太刀と馬とをお贈りいただき、例年どおりにお付き合いくださる……あなたには方々で骨を折っていただき心苦しい限りではありますが、ここは、「南方辺」（山城・摂津・河内方面）

の領主たちを味方に引き入れてください。あなたの働きこそが重要なのです」。

2. このように本書状には、将軍足利義昭と信長との対立から元亀4年（1573）7月における義昭の京都没落、すなわち「室町幕府の滅亡」にいたるまでの経緯を知る上で貴重な、以下の新情報が含まれます。
   ①元亀3年初めの段階で、信長と義昭側近衆（「奉公衆」）との対立がほとんど修復不能なまでに悪化していたこと。
   ②ところが、義昭の側近中の側近であった細川藤孝ただ一人が、信長と通じていたこと。
   ③当時岐阜にいた信長は藤孝を頼り、藤孝をつうじて、山城（現京都府南部）から摂津・河内（現大阪府）方面の領主たちの信長方への組織化を、半年にもわたりすすめていたこと。
3. 本書状から、藤孝による畿内領主層の信長方への組織化が元亀3年8月頃から本格化した事実が判明し、翌年2月の義昭の信長への「逆心」・挙兵の時点で、すでに半年にも及んでいたことがわかりました。これは、義昭の反信長の挙兵が畿内領主層の協力不足のために不発となった事実を考える上でも、たいへん重要です。信長の権力のあり方を大きく左右した細川藤孝の存在がクローズアップされます。

【人物解説】細川藤孝（1534―1610）

幕府家臣の三淵家に生まれる。13代将軍足利義輝の奉公衆として台頭し、義輝暗殺後はその弟・義昭の側近として義昭と織田信長を結び付け、幕府の再建に尽力。義昭の京都没落に際しては信長のもとに残り、信長の直臣大名として活躍。豊臣政権のもとでは秀吉の文化ブレーンとなる。近世大名肥後細川家の初代。

「織田信長書状」　細川藤孝宛　（元亀3年〈1572〉）8月15日　永青文庫蔵

（説明）

［研究の背景（織田政権に関する研究状況）］

近年、公益財団法人永青文庫と熊本大学永青文庫研究センターは、東京都文京区目白台の永青文庫収蔵庫に保管されている古文書等の共同調査に取り組んできました。本書状は、この調査の過程で2022年に発見された永青文庫60通目の信長発給文書です。その内容は、近年歴史学界で進展している織田権力像の見直しという大きなテーマと深く関係するものでした。

室町幕府の15代将軍となった足利義昭と、彼を推戴する織田信長が、永禄11年（1568）に京都に樹立した政権は、諸国大名に発した将軍停戦令の形態・内容といい、畿内における統治形態といい、戦国期の幕府体制そのものでした。近年の諸研究は、こうした認識を前提に、守旧的な義昭と革新的な信長が必然的に反目し、将軍義昭が排除されて「室町幕府の滅亡」にいたる、とみる通説を、ほぼ克服しています。

また、武田信玄宛の義昭書状の年代比定や、信長から義昭への17ヵ条の意見書（諫言（かんげん））の提出時期が

見直され、元亀3年（1572）から義昭自身が「第二次信長包囲網」を組織したとの通説は退けられています。信長の方も、伝統的な幕府体制を克服の対象とは最後までみておらず、むしろその立て直しこそが、京都に権力を保持する現実的条件だと考えていたことが、複数の史料から窺えます。むろん義昭にとっても、上洛以来、自身を将軍たらしめてきたのが信長の実力であるという厳然たる事実は、否定しようもありませんでした。

では、両者が決裂するにいたったのは何故か。それが改めて問われています。

［新発見書状の内容］

この書状の現代語訳は、以下のとおりです。

八朔(8月1日)の祝儀の詞を承りました。わけても帷子(かたびら)2着を送っていただき、その懇切ぶりに感謝します。今年は「京衆」(将軍義昭の奉公衆)は誰一人として手紙や贈物をよこしてきません。その中にあってあなたからは、初春にも太刀と馬とをお贈りいただき、例年どおりにお付き合いくださる。この上なくめでたいことです。鹿毛の馬を贈ります。乗り心地は悪くないと思います。あなたには方々で骨を折っていただき心苦しいのですが、いまこそ大事な時です。「南方辺」(山城・摂津・河内方面)の領主たちを、誰であっても、信長に忠節してくれるのであれば、味方に引き入れてください。あなたの働きこそが重要なのです。なお、具体的には他の案件と一緒にお伝えします。

8月15日　信長から細川藤孝殿へ

「京衆」には「京都の人々」という一般的意味がありますが、本書状の内容の政治性と、「京衆」に当の藤孝をも含むことからみて、信長が具体的に義昭の奉公衆（側近衆）を指して用いた表現であることは明らかです。

［本書状の年代比定］

当時、書状には年号を書き入れないという作法がありましたから、それが何年の書状なのかは、他の文書や記録を手掛かりに推定するほかありません（書状の年代比定(ひてい)）。

藤孝は、義昭没落直後の天正元年（元亀4＝1573年）8月2日には苗字を「細川」から「長岡」へと変えていることが確認されます（志水家文書ほか）から、「細川兵部大輔（藤孝）」に宛てた8月15日付の本書状の年代は、元亀3年以前となる可能性が極めて高くなります。

次に花押型は、元亀4年2月の信長書状（永青文庫所蔵）のそれと同一ではありませんが類似し、元亀2年に比定される信長書状（革嶋家文書ほか）のそれとは大きく異なっています。

さらに、「今年は信長と義昭奉公衆との音信が断絶した」と伝えるその内容からみても、義昭没落前年にあたる元亀3年に比定するのが適切です。

［足利義昭挙兵にいたる経緯］

近年の研究によれば、元亀4年2月の義昭挙兵へといたる直接の端緒は、元亀3年7月からの信長による浅井長政攻撃に見いだされています。信長の攻撃は、浅井・朝倉・大坂本願寺・比叡山による反信長連合を形成させてしまいます。しかもその直前の5月には、三好義継・松永久秀が義昭から離反し、畿内の情勢も急を告げていました。

義昭は畿内・近国の混乱に対処するため、8月上旬、本願寺顕如(けんにょ)と姻戚関係をもち信長とも良好な関係にあった武田信玄に、信長と本願寺との調停を依頼しました。しかしこれは、幕府政治に信玄を引き込み、義昭自身の意図とは無関係に信玄と信長を対立させる結果を招くことになり、10月3日、朝倉義景・本願寺に誘引された信玄は甲斐を出陣します。

ところが連合の核であった義景は、長陣の末に12月初め、越前に帰国してしまいます。はしごを外された信玄は、この段階で義昭本人の擁立をはかります。一方の信長は、義昭に17ヵ条の意見＝諫言を実行しました。

このような政治的混迷の末、翌元亀4年2月13日、ついに義昭は信長に「御逆心」して挙兵し、信長から信玄を含む大名・領主連合への乗り換えに踏み切ることになったのです。

［義昭奉公衆と信長との対立］

義昭の意思決定に多大な影響を与えたのは、「奉公衆」と呼ばれた義昭側近衆でした。特に有力な者に上野秀政、一色（いっしき）藤長、一色昭秀、曽我助乗（すけのり）、飯川信堅、それに三淵（みつぶち）藤英・細川藤孝兄弟などの存在が知られます。わけても上野秀政は武田信玄を信長排除陣営に引き入れた張本人とみられ、同時代の宣教師の著述や、細川家の公式記録『綿考輯録』では、義昭への取次として信長と並ぶ発言力を保持し、反信長の立場から、藤孝とは露骨に対立したとされています。

そして、信長自身が義昭の自分への「御逆心」は藤孝以外の奉公衆の仕業によるものだと認識していたことは、次のような一次史料でも確認できます。

元亀4年2月26日付の細川藤孝宛信長書状（永青文庫所蔵）で、信長は藤孝に、「奉公衆のうちで自分と義昭との和睦に納得しない者から人質を出すよう将軍サイドに求めた。自分と藤孝との内通関係をカモフラージュするため、人質提出対象者名簿に藤孝もことさらに加えておいたので、承知するように」と伝えています。さらに、いま義昭が思い直してくれさえすれば「天下再興」（幕府体制の立て直し）がなるのだが、と述べています。

さらに奈良の興福寺大乗院門跡の尋憲は、日記『尋憲記（じんけんき）』元亀4年2月28日条で、信長が事態を収拾するため明智光秀を京都から岐阜に召喚して義昭逆心の事情を聴取したと記しています。その結果信長は、これは義昭の「上意」によるのではなく、三淵藤英・細川藤孝兄弟を除く義昭「内衆」（奉公衆）が画策したことだと断定し、彼らを「成敗」するため軍勢5,000で上洛する情勢だ、とも明記しています。

［新発見書状が語ること］

以上の経緯の中に本書状を位置づけると、以下の2点が浮かび上がってきます。**関係年表**も併せてご参照ください。

①**「今年は「京衆」（将軍義昭の奉公衆）は誰一人として手紙や贈物をよこしてきません。その中にあってあなたからは、初春にも太刀と馬とをお贈りいただき、例年どおりにお付き合いくださる」**

「室町幕府の滅亡」の主因となった信長と義昭奉公衆との絶交・対立、そして奉公衆のうち細川藤孝ただ一人が信長と内通している状況は、遅くとも元亀3年の初めには決定的となっていたこと。すなわち、前年9月の比叡山焼討ちを経た元亀3年初めこそが、義昭・信長幕府崩壊への画期となったこと。

②**「いまこそ大事な時です。「南方辺」（山城・摂津・河内方面）の領主たちを、誰であっても、信長に忠節してくれるのであれば、味方に引き入れてください」**

藤孝による畿内領主層の信長方への組織化は、義昭が武田信玄に信長・本願寺の調停を依頼したのとほぼ同時に、元亀3年8月頃には本格化していたこと。

この点について、永青文庫所蔵の他の信長書状によれば、藤孝の活動は翌元亀4年2月の義昭挙兵の後まで続けられていたことがわかります。義昭の挙兵が、畿内領主層の支持が不充分なまま潰えた

背景には、藤孝の半年にもわたる活動が反信長勢力を抑制したという事情があったのです。

このように本書状は、「室町幕府の滅亡」へといたる複雑な政治史を読み解く上で欠かせない事実を信長自身が語った、信頼すべき一次史料です。

［今後の展開］

信長が、**「あなたの働きこそが重要なのです」**と書き送っていたように、幕府政治が混迷の一途を辿った元亀年間（1570―1573）、信長の京都における頼みの綱は細川藤孝でした。信長と同じ1534年に幕府家臣の名門三淵（みつぶち）家に生まれた藤孝は、13代将軍足利義輝の奉公衆として台頭し、義輝が暗殺されると、その弟の義昭の側近中の側近となり、義昭と信長を結び付けて正統幕府を再興するという大仕事をやってのけます。その藤孝が「室町幕府の滅亡」を実現させるキーマンともなったのです。信長と幕府権力のあり方を大きく左右した細川藤孝の畿内領主層との人脈、当該時期における彼の具体的活動や政治思想を究明することが、「本能寺の変」を含む織田政権期の政治史研究にとっての大きなテーマとなります。

なお、本書状の原本は、東京都文京区目白台の永青文庫で2024年10月5日～12月1日に開催される秋季展「熊本大学永青文庫研究センター設立15周年記念「信長の手紙」」に出品されます。また、同展覧会に合わせて刊行予定の『永青文庫 織田信長文書の世界―珠玉の 60 通―』（勉誠社）に収録されます。

●永青文庫とは

永青文庫は、肥後熊本54 万石を治めた細川家の下屋敷跡にある、東京で唯一の大名家の美術館です。細川家は南北朝時代の頼有（1332～91）を始祖とし、近世細川家の初代藤孝（幽斎、1534～1610）と2 代忠興（三斎、1563～1645）が大名家の礎を築き、3 代忠利より240 年にわたって熊本藩主をつとめました。永青文庫の名称は、中世細川家の菩提寺である建仁寺塔頭・永源庵の「永」、初代藤孝の居城・青龍寺城の「青」に由来します。所蔵品は、細川家伝来の美術工芸品や歴史資料、そして設立者である16 代細川護立（1883～1970）の蒐集品で、国宝8 件・重要文化財35 件を含む9 万4000 点にのぼります。

【お問い合わせ先】
熊本大学永青文庫研究センター
担当：（センター長・教授）稲葉 継陽
電話：096-342-2304
メール：inaba@kumamoto-u.ac.jp

別紙

関係年表

年 代	西暦	月	事　　項
永禄 8 年	1565	12	細川藤孝、足利義昭側近として、義昭と織田信長とを結び付ける
永禄 11 年	1568	10	信長、義昭を推戴して上洛し幕府体制を樹立
元亀 2 年	1571	9	信長、比叡山延暦寺を焼討ち
元亀 3 年	1572	1	藤孝以外の義昭奉公衆が信長と絶交
元亀 3 年	1572	5	三好義継、松永久秀が義昭・信長から離反
元亀 3 年	1572	7	信長が浅井長政を攻撃、浅井・朝倉・本願寺・比叡山による反信長連合が形成される
元亀 3 年	1572	8	義昭、武田信玄に信長と石山本願寺との調停を依頼
元亀 3 年	1572	8	信長、藤孝に京都以南の畿内領主層の組織化を内密に依頼
元亀 3 年	1572	10	信玄、朝倉義景・石山本願寺の要請によって出陣
元亀 3 年	1572	12	信玄が足利義昭を擁立、信長は義昭に 17 ヵ条の意見書（諫言）を提出
元亀 4 年	1573	2	義昭が信長に「御逆心」して挙兵、藤孝は京都以南の領主層の組織化を継続
元亀 4 年	1573	2-3	信長入京して義昭を包囲、義昭和談に応じる
元亀 4 年	1573	4	武田信玄死去する
元亀 4 年	1573	7	義昭、再度挙兵するも畿内の領主層を結集できずに没落（「室町幕府の滅亡」）

熊本大学 Kumamoto University　細川コレクション 永青文庫 EISEI BUNKO MUSEUM

情報解禁日：2025年3月21日（金）記者発表終了後

令和７年３月１４日

報道機関　各位

【記者発表のご案内】

永青文庫が熊本大学に寄託している貴重資料のうち
新たに9,346点が国の重要文化財に

（ポイント）

- 令和7年3月21日、文化審議会（文化財分科会）は、公益財団法人永青文庫が所有し熊本大学附属図書館に寄託している貴重資料のうち、古文書9,346点を国の重要文化財「細川家文書」に追加指定するよう、文部科学大臣に答申する予定です。
- 「細川家文書」のうち、織田信長文書群をはじめとする中世文書等266点は、2013年に国の重要文化財に指定されています。今回はそれらに、細川家々伝の資料（御家の宝）と位置づけられた、17世紀初期から明治初期にかけて作成された貴重な史料群を追加するものです。これによって、永青文庫所有の貴重資料のうち国の重要文化財「細川家文書」は9,612点になりました。
- 追加指定文書の中でも特に注目されるのは、戦国武将として著名な細川忠興（三斎）や、寛永期（1620～30年代）の明君と評価される細川忠利らの発給文書群、忠利やその後継者細川光尚の裁可文書群、寛永末期の細川家代替り（忠利→光尚）に際して家臣たちから相次いで提出された血判起請文群、忠利・光尚の相談役であった沢庵和尚が彼らに送った書状群などで、江戸時代初期の古文書としては質・量ともに類例をみません。さらに、19世紀に家臣団から藩主に上申された意見書・献策書等を取りまとめた「上書」65冊や、熊本城天守に保管されていた細川家歴代当主の甲冑の廃藩置県に際しての行方を示す証文群など、近世中期以降の貴重な文書も多数含まれます。
- 今次の追加指定は、熊本県教育庁文化課所管の永青文庫常設展示振興基金（2008年設置）から資金配分を受けた熊本大学が、永青文庫研究センターを設置し、公益財団法人永青文庫と協力しながら、2009年から約7年半の歳月をかけて作成した「熊本大学寄託永青文庫資料総目録」（約5万7,700点分）のデータを基にして実現されました。基金の創設と基礎調査にご尽力いただいた各位に、深くお礼申し上げます。

（記者発表について）

本件について、詳細を説明する機会を下記のとおり設けます。参加をご希望の場合は、お手数ですが、

３月１９日（水）までに、下記の申込みリンクまたはQRコードからお申込み願います。

記

・日時：令和７年３月２１日（金）17:00～18:00
　※文化庁の審議会終了時刻によっては開催時刻が遅れる可能性もあります。
・登壇者：細川護光（公益財団法人永青文庫理事長）、稲葉継陽（熊本大学永青文庫研究センター長）
・場所：熊本大学黒髪南地区事務局1階大会議室、オンライン（Zoom）
　※オンライン参加の場合は、折り返しリンク等をご連絡いたします。チャットで質問も可能です。
・申込みフォーム： https://forms.gle/Lf6YvWJZfRVnN1cm6

［追加指定までの経緯］

1.　「永青文庫常設展示振興基金」と「熊本大学永青文庫研究センター」の設置

永青文庫は、室町期以来の細川家の歴史の中で蓄積されてきた美術工芸品や、中世から近世にかけての膨大な古文書類を所蔵している公益財団法人です。このうち、1,800点余の美術工芸品は熊本県立美術館に、また5万7,000点を超える文献史料や古典籍等は熊本大学附属図書館に寄託されていますが、従来は充分な全体調査が行われず、その全貌は明らかではありませんでした。このため熊本県は、県内の企業・団体の協力のもと、2008年3月に「永青文庫常設展示振興基金」を立ち上げ、それを原資として、日本でも有数の価値を持つ永青文庫資料の公開・活用に向けた取組みを開始しました。

中世から近世にかけての永青文庫の史料群は、質・量ともに日本最大級で、明治以降は細川忠利など歴代藩主の菩提寺であった妙解寺（現熊本市 北岡自然公園）の跡に建てられた北岡邸の蔵に保管されていましたが、1964年以降に熊本大学附属図書館に寄託され、現在に至っています。織田信長の文書群のほか、特に近世初期の膨大な当主書状類や裁可文書群、さらに藩政（行政）記録類が充実しており、日本近世の基礎資料として全国的にみても比類なき価値を持つものです。そこには統治、自治、法制、建築、土木、科学、文学、教育、美術ほか、人間活動のほとんど全域に及ぶ情報が集積されており、詳細な目録の作成と公表が行われれば、歴史研究のみならず、さまざまな領域で新たな知見をもたらすことが予想されました。そこで熊本大学では、2009年4月1日に「永青文庫研究センター」（当初は文学部附属）を立ち上げ、熊本県からの受託研究という形で上記基金の配分を受け、古文書等の総目録の作成を開始しました。

2.　「熊本大学寄託永青文庫資料総目録」の完成から国重要文化財への指定へ

「熊本大学寄託永青文庫資料総目録」（約5万7,700点分）は2015年11月に完成し、公益財団法人永青文庫や熊本県立美術館をはじめとする関係各機関に共有されて、研究や展覧会の企画立案等に活用されています。

その間の2013年6月には、織田信長の手紙58通を含む「永青文庫細川家文書」266通が国の重要文化財に指定されました。今度の指定はそれに次ぐものです。

2022年以来、文化庁文化財第一課と熊本大学永青文庫研究センター、公益財団法人永青文庫は、上記「総目録」記載データと資料現物との一点ごとの引き合わせ確認作業を継続しています。このたび追加指定される予定の永青文庫細川家文書9,346点は、この引き合わせ作業を完了した分で、全国的にも貴重な17世紀初期の文書が多数含まれています。

「永青文庫常設展示振興基金」の設置に尽力された方々、またお力添えいただいた企業・団体のみなさま、目録作成や引き合わせ確認の作業にご協力いただいたすべての方々に、厚くお礼申し上げます。

［指定文書群の内容］

今次の追加指定文書には、細川家の歴代当主＝藩主に直接関係する古文書が膨大に含まれます。これらは、江戸時代中期以降に統治機構としての藩の活動に即して作成された記録群（藩政史料）とは区別

され、家伝の資料（御家の宝）と位置づけられていた史料群です。

１．近世前期の文書群

⑴ 細川忠興（三斎、1563～1645）書状群

慶長５年（1600）から正保２年（1645）まで、細川忠興（三斎）が、後継者の忠利、その後継者の光尚に発し続けた書状群で、1,900 通以上を数える。大半が江戸・国許間での情報交換に用いられたものである。初期幕藩関係の動態を示す貴重な政治史資料として評価されているが、内容はそれにとどまらず、領国支配、大名家の経済、大坂の陣や島原・天草一揆などの戦乱、文化、領国の自然、災害、開発、さらには領内の民心のあり方などにまで及ぶ。この時代の国家から領国社会までの態様をつぶさに語る無二の史料群である。

⑵ 細川忠利（1586～1641）書状群

寛永９年（1632）末に熊本に入封してから死去の直前まで、忠利が国許から後継者の光尚（在江戸）らに出し続けた書状群で、400 通以上が伝存し、忠興書状群に準じる貴重な内容をもつ。わけても、熊本藩主として初めて熊本城に入った忠利の第一声や、島原・天草一揆鎮圧のために出陣した光尚への叱咤激励を自筆で記した書状などは出色である。

なお、⑴および⑵は 2018 年に熊本県重要文化財に指定されている。

⑶ 細川忠利・光尚（1619～1649）達書群

国許の奉行所で領国統治や人事に関する案件等を統括した「惣奉行衆」らに藩主が意思を伝達するのに用いた文書群。江戸や参勤途中で国許に発したものと国許で発したものでは様式が異なり、書状形式や自筆切紙、条書形式など、全体数約 1,700 通が５類型程度に分類される。奉行たちからの上申・報告を藩主が追認する内容のものも少なくない。初期国持大名の領国支配のあり方を極めて具体的に示す史料群である。

⑷ 細川忠利・光尚裁可文書群

国許で奉行衆が行政案件や人事案件を上申した文書（伺書）に忠利自身が裁可を加えた複合文書が、小倉藩主時代（1621～32 年）、熊本藩主時代（1632～41 年）に平均して作成され、続く光尚の裁可文書も合わせると約 650 点伝存している。⑶とともに、単なる上意下達ではない、下位の担当者による起案→上司への上申→藩主裁可→下達・執行という過程による初期大名家の意思決定の構造を示してくれる、類稀なる文書群である。

⑸ 家臣団血判起請文群

寛永 18 年（1641）３月に細川忠利が死去すると、細川家家老衆と細川三斎は、八代（やつしろ）の三斎隠居領や三斎末子（忠利弟）立允（りゅういん）の処遇をめぐって対立し、御家騒動が危惧される事態になった。この時期に、細川家臣団は家老衆や新藩主光尚に次々と血判起請文を提出し、御家と御国（あわせて「御国家」）のために奉仕することを誓った。永続的な政治行政単位としての近世大名家確立の画期を語る貴重な史料群で、100 通以上が伝存する。

起請文とは、自らの主張や約束が偽りなきことを仏神に誓約する文書で、中世に成立し、前半部分に主張・約束の内容を記し（「前書」）、後半には寺社が発行する「牛王宝印（ごおうほういん）」と呼ばれた護符の裏面に前書の内容を担保する自己呪詛文言（「神文（しんもん）」）を書いて貼り継ぐ様式が一般的で、戦国期には誓約者の血判がすえられ、誓約する相手の名前を明記するようになった。今回指定される細川家臣団の起

請文も、こうした近世起請文の様式上の特徴を備えている。

⑹ 細川三斎隠居家関係史料群

正保2年（1645）12月に細川三斎（忠興）が死去すると、当主光尚と細川家老衆によって三斎隠居家は解体される。そのときに三斎に仕えてきた家臣たちが提出した御暇願等28通が伝存する。三斎一代限りに奉公するのを道理と主張する戦国ふうの主従制観をもつ最後の世代の武士たちの肉声であり、⑸の血判起請文群と合わせて、時代の画期を語る史料群である。

⑺ 江戸幕府将軍・老中発給文書

歴代将軍や江戸幕府老中から細川家歴代藩主に出された文書群。将軍発給の文書は御内書と呼ばれ、礼状を中心に、180通余の伝存が確認される。江戸幕府老中のものは約160通あり、「老中奉書」と呼ばれ、幕府から諸藩への意思伝達に用いられた。江戸や時に上方で繰り広げられる将軍と諸大名との儀礼に関するものや、江戸城をはじめとする公儀の城普請、居城普請、それに加藤家改易と細川家肥後移封に関する史料等も含まれる。

⑻ 沢庵書状群

大徳寺住持として紫衣事件（1627年）で幕府の宗教政策に異議を申し立て、後に将軍徳川家光に近侍して細川家歴代とも深く交流した沢庵宗彭（1573～1646）が、忠利や光尚に宛てた書状が130通伝存している。江戸からの情報提供だけではなく、忠利に禅や兵法の神髄を語り、若き光尚に藩主としての心得を説諭するなど、率直な内容に驚かされる。

⑼ 兵法・軍法関係史料群

細川忠利・光尚が相伝した兵法や軍法の関係史料が豊富に伝存している。中山照守の高麗八条流馬術、疋田新陰流の兵法、坂巻重勝の東軍流兵法、松山主水の中条流兵法、柳生宗矩の新陰流兵法、小幡勘兵衛の甲州流軍学などに関する史料があり、⑻とも合わせて、近世初期の大名本人が身に付けた兵法と軍学、さらにその背後にある思想までをも示してくれる。

２．近世中期～明治初期の文書群

⑴ 細川綱利（1643～1714）・重賢（1721～1785）・斉茲（1759～1835）・斉樹（1789～1826）・斉護（1804～1860）ら歴代藩主書状群

幕藩関係、家中の人事、財政改革、難渋者救済、対外関係などについて、上記の藩主らが家老や奉行に意思を伝達した書状等が写も含めて800通以上伝存する。当該期の政治行政上の諸課題への対応に、藩主がどのようなスタンスで関与したのかを示す史料群である。

⑵ 細川家姫君消息群

細川藩主の妻、姉妹、娘たちが、江戸や嫁入り先から藩主に宛てた仮名書きの手紙群。日常生活や家族の様子、親類とのやり取りの様子、節句や年末年始の祝儀・贈答について伝えたものが大半だが、歌人として著名な就姫（細川治年娘、久我通明室、1787年生）の消息には、細川幽斎二百回忌の追善和歌勧進と幽斎神格化に関するものが含まれる。近世歌壇史研究に資する史料である。

⑶ 上書

主に19世紀における藩主代替りに際して、家臣から提出され藩主の上覧に供された藩政諸般に関する意見書・献策書等を冊子にまとめたもの。全65冊446通が伝存している。近世後期の藩主が、統治、経済、学問、思想にまで及ぶ「国中の公論」を吸収して理想的な政治を実現する姿勢を求めら

れていたことを示す史料群である。

⑷ 歴代当主甲冑関係史料群

明治4年（1871）の廃藩置県の翌年から明治6年にかけて、細川家は熊本城天守内に保管していた歴代藩主の甲冑を家臣たちに預けた。それら家臣たちが細川家に提出した甲冑預り願書および預り証書等が200通以上伝存している。廃藩置県による熊本城明渡しに際しての家臣たちの動向の一端を示すとともに、現存する細川家当主所用甲冑の廃藩以後の来歴を知る手がかりとなる点でも貴重である。

３.その他に注目される個別史料

⑴ 霜女（しもじょ）覚書

関ヶ原前哨戦における細川ガラシャ（細川忠興正室・明智玉）の死去から48年後にあたる正保5年（1648)、侍女の一人であった霜が、大坂細川邸でのガラシャ最期のありさまを伝えるために記したもの。現場に居合わせた人物の唯一の証言として、きわめて貴重な一巻である。現在広く共有されているガラシャ最期のイメージは、本覚書に由来するところが大である。

⑵ 細川光尚遺書

慶安2年（1649）12月、細川光尚が死の直前に江戸藩邸で作成し、大老酒井忠勝らに将軍への披露を託した遺書。嫡子幼少を理由に肥後54万石の返上を申し出るという驚くべき内容の遺書である。幕府はこれをいったん受理するものの、じつは細川家老衆には領知返上の意思はなく、翌年4月に幕府は細川綱利への熊本領一円相続を認め、本遺書は細川家に返却された。こうして細川家存続の陰の歴史を示す遺書が永青文庫に伝わることとなった。

⑶ 萬一熊本城渡申候時之相験（あいしるし）（細川斉茲自筆）

寛政元年（1789）3月、藩主細川斉茲は参勤のため熊本を発つ当日、もし熊本城を幕府に明け渡さねばならない事態になったなら、間違いなく自分の城明渡しの意思が国許に伝わるように、「相験」を用意した。自筆文書の奥書・印判部分を中央で裁断し、一方を江戸にいる自分が持ち、それが国許に送られてもう一方と合致したときにのみ、熊本城を幕府に渡すという手筈であった。同様の相験は、近世後期の他の藩主が作成したものも伝存している。たとえ藩主が江戸で幕府から改易や転封を命じられたとしても、藩主自身の明確な意思表示がなければ、国許の家老らは居城を決して明け渡さなかった。大名家の幕藩関係からの一定の自律性を示唆する史料である。

［今後の展開］

このように、今回の指定文書群は大名家当主本人の資質、大名家の組織の特質とその転換、幕藩関係、大名家の意思決定、経済、政策形成、社会思想、学問、文化に至るまで、近世日本の社会と国家を理解するための第一級の情報の集積体です。今度の国の重要文化財への指定を契機に、多くの研究者との共同研究を組織して成果を発信するとともに、原本の保全をはかりながら、史料画像の一般への公開を拡大していく予定です。

さらに、熊本大学寄託永青文庫資料の全体の指定をめざし、目録と現物との引き合わせ確認作業を継続していきます。

なお、今度の指定史料の原本30点程度を、2025年11月初旬に熊本大学で開催される熊本大学附属

図書館貴重資料展にて公開する予定です。また、永青文庫（東京・目白台）でも、研究者だけでなく多くの方に研究成果を分かりやすくお伝えできるような展覧会を計画してまいります。

●永青文庫とは

永青文庫は、肥後熊本 54 万石を治めた細川家の下屋敷跡にある、東京で唯一の大名家の美術館です。細川家は南北朝時代の頼有（1332～91）を始祖とし、近世細川家の初代藤孝（幽斎、1534～1610）と 2 代忠興（三斎、1563～1645）が大名家の礎を築き、3 代忠利（1586～1641）より 240 年にわたって熊本藩主をつとめました。永青文庫の名称は、中世細川家の菩提寺である建仁寺塔頭・永源庵の「永」、初代藤孝の居城・青龍寺城の「青」に由来します。所蔵品は、細川家伝来の美術工芸品や古文書、そして設立者である 16 代細川護立（1883～1970）の蒐集品で、国宝 8 件・重要文化財 35 件を含む 9 万 4000 点にのぼります。

【お問い合わせ先】
熊本大学永青文庫研究センター
担当：（センター長・教授） 稲葉 継陽
電話：096-342-2304
メール：inaba@kumamoto-u.ac.jp

５．講演要旨

⑴ 稲葉継陽「信長・藤孝・光秀―「室町幕府の滅亡」と「本能寺の変」―」

⑵ 今村直樹「横井小楠の人脈と思想形成過程」

信長・藤孝・光秀―「室町幕府の滅亡」と「本能寺の変」―

2024年永青文庫秋期展「信長の手紙」記念講演会
於 日本女子大学 新泉山館 2024年11月2日
熊本大学永青文庫研究センター 稲葉 継陽

はじめに

▼「室町幕府の滅亡」と9年後の「本能寺の変」との因果関係を追究すると、織田権力の構造的な特質、すなわち信長の意思に反したイレギュラーな権力体であったことがみえてくる

▼織田権力の構造的特質＝弱点を克服し、統一国家を構築するべく行動する主体としての明智光秀と細川藤孝

Ⅰ 織田信長・細川藤孝と「室町幕府」

1.「天下布武」の「天下」とは？

⑴ 信長の言う「天下」の意味

1）信長の書状から

①元亀2年（1571）3月 上杉謙信に「**天下の状況に異常ありません**」（上杉家文書）

②元亀4年（1573）2月 細川藤孝に「**義昭様との関係がこのような形になり、本当に思いも寄らないことだ。いま義昭様に思い直していただければ、「天下再興」となるのだが**」（永青文庫細川家文書）

③天正3年（1575）7月 小早川隆景に「**天下はなお平穏な状況です**」（小早川家文書）

④イエズス会宣教師ルイス・フロイス（『16・7世紀イエズス会日本報告集』）

「**日本全土は 66 の国に分かれている…その中で最も主要なものは日本の君主国を構成する五畿内の5つの王国である。というのはここに日本全土の首都でもある都があるからである。そして五畿内の君主となるものを天下の主君、即ち日本の君主国の領主と呼び、そのもてる権力と幸運とに合致するだけ、天下の主君である者はその他の国々を従えようとするのである**」

➡「諸国」大名の統一が成されていないこの時期にあって、「天下」という言葉は、地域的には将軍の統治する「五畿内」（山城、大和、摂津、河内、和泉）、政治的には天下の主宰者としての将軍の権威や権力を指して用いられていた。つまり、「天下」とは幕府体制そのものの謂

⑵ 歴史的所与としての「室町幕府」

1）義昭と信長の権力分掌

▼永禄13年（1570）正月 信長から義昭への5ヵ条の意見状（成簣堂文庫所蔵文書、義昭も承認）の「天下」と「諸国」

【第1条】**義昭が「諸国」の大名に手紙で伝える案件がある場合は、信長にその旨を伝え、信長の添状を付けること**

【第4条】**「天下」における政治権限はすべて義昭が信長に委任したのだから、相手が誰であっても、将軍義昭の「上意」を得るには及ばず、信長の判断によって「成敗」することができる**

【第5条】**「天下」は平和になったのだから、義昭は将軍として朝廷の儀式等をすべて滞りなく執行せねばならない**

2）信長の義昭観

▼元亀4年（1573）3月7日 義昭の挙兵をうけて細川藤孝に（永青文庫細川家文書）

「**公方様の御所行（信長排除の挙兵）は、どうともしようのないこと（「是非に及ばざる次第」）である。だが、公方様と私は「君臣之間」にあるので、幾度も説明申したところ、私の訴えをお聞き入れになったので、実子を人質として進上した…明日上洛する**」

➡将軍を推戴した世俗の大名が、将軍から「天下」の統治・成敗権を委任され、将軍（「天下」）と「諸国」大名との関係づくりを管理するという、戦国期室町幕府のあり方（ただし将軍と当該大名との対立は頻発）は、信長にとって歴史的所与であった。だが、克服の対象であったのか？

2. 信長と藤孝

⑴ 義輝・義昭と諸大名との取次としての藤孝（父方は幕臣三淵家、母方は公家の清原家）

▼永禄7年（1564）以降、将軍と相良氏・島津氏などとの取次として盛んに活動、永禄8年5月の将軍義輝暗殺に際しては、奈良にいた義昭を救出して信長と結び付ける

永禄8年12月5日 信長から藤孝に（東京大学史料編纂所所蔵文書）

「**すでに度々了承したように命令次第でいつでも義昭の帰洛に「供奉」（お供）します。越前・若狭の勢力にも協力を命じるべきと存じます**」

➡永禄11年（1568）10月、信長、義昭を推戴して上洛し幕府体制を樹立、義昭・信長幕府樹立の影の立役者は藤孝

⑵ 新発見の（元亀3年）8月15日付藤孝宛信長書状が示すこと（→「室町幕府の滅亡」関係年表）

「**八朔（8月1日）の祝儀の詞を承りました。わけても帷子2着を送っていただき、その懇切ぶりに感謝します。**

1）**今年は「京衆」（将軍義昭の奉公衆）は誰一人として手紙や贈物をよこしてきません。その中にあってあなたからは、初春にも太刀**

と馬とをお贈りいただきました。例年どおりにお付き合いくださり、この上なくめでたいことです。
鹿毛の馬を贈ります。乗り心地は悪くないと思います。
2) **あなたには方々で骨を折っていただき心苦しいのですが、いまこそ大事な時です。「南方辺」(山城・摂津・河内方面)の領主たちを、誰であっても、信長に忠節してくれるのであれば、味方に引き入れてください。あなたの働きこそが重要なのです。**
なお、具体的には他の案件と一緒にお伝えします」

➡1) 元亀3年初頭以降、「天下」における政治権限をめぐって武田信玄・浅井・朝倉・本願寺・比叡山連合を支持して信長と鋭く対立したのは、義昭本人というより義昭奉公衆。その中にあって藤孝ただ一人が信長と内通、前年9月の比叡山焼討ちを経た元亀3年初めこそが、義昭・信長幕府崩壊への画期

2) 藤孝による畿内領主層の信長方への組織化は、義昭が武田信玄に信長・本願寺の調停を依頼したのとほぼ同時に、元亀3年8月頃には本格化していた。この点について、永青文庫所蔵の他の信長書状によれば、藤孝の活動は翌元亀4年2月の義昭挙兵の後まで続けられていたことがわかる。義昭の挙兵が畿内領主層の支持が不充分なまま潰えた背景には、藤孝の半年にもわたる活動が反信長勢力を抑制したという事情があった

▼藤孝の調略を受けたことが確認できる領主（永青文庫細川家文書）
荒木村重（摂津茨木)、池田勝正（摂津池田)、和田惟長（摂津高槻)、伊丹親興（摂津伊丹)、石成友通（山城淀)、内藤貞弘・灰方氏・中路氏（丹波）

3. 「室町幕府の滅亡」の意味

⑴ 信長は義昭を京都に戻したかった！
武田信玄死去、浅井・朝倉の滅亡に合わせるかのように義昭入洛交渉がはじまる

1) (天正元年) 9月7日付 毛利輝元宛羽柴秀吉書状（毛利家文書）
「**「公方様御入洛」のことについて信長に伝えたところ、信長はこれに「同心」した。(かつて信玄を「天下」に引き入れた奉公衆の)上野中務大輔、槙島玄蕃頭にも異議はなかろう。交渉の使者を上洛させられたい**」

2) (天正2年) 正月16日付 六角承禎宛足利義昭御内書（織田文書）
「**信長がしきりに自分の「帰洛」を求める使者を派遣してくるのだが、拒否の態度をあらわすため、自分は摂津から紀州に移った**」
➡都落ちした将軍が再入洛した先例は、10代足利義稙、12代義晴、13代義輝などがある
「室町幕府の滅亡」とは、将軍義昭が元亀4年7月以来二度と京都に帰らなかったという結果に基づく表現であり、信長が望んで幕府を「滅亡」させたわけではない

⑵ イレギュラーな国制としての織田政権
▼ (天正元年) 10月28日付 一色藤長宛毛利輝元書状（『別本士林證文』）
「**義昭の「御入洛」について信長と交渉しているので、義昭がご許容になれば「都鄙安泰之基」になるだろう。「御故実」にのっとることが「肝要」である**」
➡将軍不在の「天下」は由緒正しさ（正統性=Legitimacy）を有さない。その源が他所にあれば統合の核は分散
天正4年（1567）5月、方針転換した毛利氏は義昭と奉公衆らを領内に抱え込んで信長と対立へ

Ⅱ 「本能寺の変」の歴史的意味

1. 松永久秀・荒木村重・明智光秀と将軍足利義昭

⑴ 松永久秀・久通の反乱
永禄11年の義昭・信長上洛を助けた大和の同盟者松永父子は、筒井順慶・佐久間信盛を重用した信長の大和支配や本願寺攻めのあり方に不満をもち、天正5年8月、大和片岡城などで一斉に蜂起。それは将軍義昭方の本願寺顕如や毛利輝元、上杉謙信などと連携した計画的謀反
➡永青文庫の信長直筆感状は、このときに細川忠興が片岡城であげた戦功に対するもの。筆致が伝える信長の感情は？

⑵ 荒木村重謀反
「室町幕府の滅亡」に際して畿内における信長派の重鎮となった村重は、光秀・藤孝とともに織田「畿内衆」を構成して大坂本願寺攻めを担当し、摂津国を実効支配。しかし信長は本願寺攻めの司令官を佐久間信盛に、播磨攻めのそれを羽柴秀吉に担当させる→畿内衆と尾張衆との葛藤、信長は後者を優遇
▼ (天正6年) 10月25日付 細川藤孝宛織田信長黒印状（永青文庫細川家文書）
「**摂津国の村重謀反に関する種々の噂を繰り返し報告してもらって、ありがたい…光秀と相談し、悪い評判が立たないように適切に対処してくれ**」
➡天正6年10月、村重は義昭・本願寺・毛利氏と同盟して計画的に謀反。当初信長は信じようとしなかった。村重らの籠城は信長と本願寺との抗争が終結するまで1年8ヵ月にも及ぶ

⑶「本能寺の変」後の光秀と義昭

▼天正10年（1582）6月2日、信長を本能寺に殺害した10日後、光秀は長年信長と対立していた紀伊国雑賀衆の一人土橋重治に密書を送り、義昭「御入洛」への助力を要求（美濃加茂ミュージアム所蔵文書）

➡光秀の国家構想は当時のスタンダードにのっとったもの（後述）。本状が書かれた翌日、光秀は秀吉に敗死し、義昭の入洛は幻と化す

いずれの謀反も将軍足利義昭の関与ないし関連のもとで断行、それは織田権力のイレギュラーな形態に起因する

2. 光秀と信長の歴史的性格からみる「本能寺の変」

⑴ 近世的検地と軍役規定

1）百姓の夫役動員忌避

天正８年頃、城普請夫役を近江・丹波の自領内「在々所々」に賦課したにもかかわらず、滋賀郡の３つの村の人夫が不参しているとの報告を奉行から受けて激怒した光秀は、これら村々の代官に対して、

「**3ヵ村が普請夫役をサボるのは言語道断だ、陣夫として戦場に動員されてもいいのだな**」と言い放つ（真田家文書）

➡百姓は同じ夫役であっても陣夫役こそを忌避、負担と給付の客観的な基準を示さない限り、百姓を戦場に動員することは困難

2）勧農と動員

信長から「来初秋」の西国出兵が仰せ出された年（天正10年ヵ）の春、光秀が家臣らに発した文書（吉田文書）

「**西国出陣に備えるため、今年春、給人（知行取）たちは自分の知行地で 15 日間の「開作」労働に従事せよ。具体的には、家来たちに井手（灌漑水路）を開削させ、「百姓並」の田畠開墾に従事させる。それぞれの知行地に「荒地等」が存在する場合には、すべて作付け可能となるように開墾せよ。知行地の百姓が早く生産活動に専念できる状況をつくり出し、秋の収穫を兵粮米にして「西国御陣」に即応できるようにすることが重要である**」

➡「天下」の外への戦線拡大によって明智領の知行地百姓の経営が圧迫、荒廃耕地の出現や春の勧農の遅滞によって給人経済が衰退⇒領国検地を断行

3）検地と軍役―信長とのずれ―

▼江戸時代初期までに確立する石高制による社会編成は契約的統治の体系

→江戸初期に６万を数えた住民（百姓）共同体である村の田畑の面積を検地（実測）し、それに反当りの公定石高を掛け合わせ、村の経済的規模を石高で表示＝村高

①村高：百姓たちは、この数値を基準にして年貢や夫役（労役）を領主に納入

②知行高：大名家の家臣たちは、こうした村の石高を当主から自分の領地として与えられ、いざ戦争というときは、その数値に見合った兵卒を率いて参陣

③領知高：大名家は、自領内の村々の石高の総和である領知高（加賀100万石、肥後54万石など）を中央政府から認定され、それに準じて中央政府からの軍役動員をうけた

➡石高は、江戸時代における社会的負担の基準値として機能。光秀や柴田勝家、それに秀吉ら直臣大名は、畿内周辺の村々と対峙する過程で、上の①②の仕組みを構築

光秀の②の基準値は高100石につき兵卒４人・陣夫百姓２人（１日米８合を給付）の動員（御霊神社文書ほか）

④織田政権の歴史的段階：信長自身と光秀らとの間に③の基準が成立せず（信長による領知石高安堵の欠如）

客観的数値基準によらねば百姓や家臣を動員できない光秀ら＝近世的権力と、基準なき軍事動員を光秀ら直臣大名に要求し続ける信長＝中世的中央権力とのズレ

➡総体としての織田権力が戦争を継続すればするほど、「中世的な信長権力」と「近世的な織田大名権力」との矛盾は拡大、それは信長が西国大名に対する武力行使を激化させた天正10年６月、頂点に達したはず

⑵ 畿内管領としての光秀

天正８年段階で、近江滋賀郡（坂本城）と丹波一国（亀山城・八上城・福知山城）を領有して京都の東西を押さえ、山城・大和両国、近江高島郡、丹後一国の織田部将・国人領主に対する軍事統率権を保持

➡「天下」および周辺で同様の地位・権限を有したのは、羽柴秀吉（播磨・但馬）、柴田勝家（越前）、丹羽長秀（若狭）

都を囲い込むように展開する光秀の支配・軍事領域の重要性は際立ち、明智領国は京都を中に置いて一体として経営

天正９年２月に信長が京都で催した馬揃には、五畿内衆が総動員、その一切を取り仕切ったのは光秀（『立入隆佐記』等）

四国・中国出兵のため京都市中に出てきた信長を止められるのは、畿内管領・光秀をおいて他になし

3. 織田政権の権力構造からみる「本能寺の変」

⑴ 大坂攻めでの尾張衆優遇

信長は司令官役に尾張出身の塙直政（山城・大和守護）、次いで佐久間信盛を付け、光秀・村重・藤孝らの畿内衆をあくまで別働隊として起用し、久秀や村重の謀反を誘発

⑵ 四国・中国問題

1）四国

光秀家老の斎藤利三が土佐の長宗我部元親と姻戚関係にあったため、光秀は元親と信長の取次役を担当

天正９年頃から信長は阿波国の割譲を元親に要求、翌年６月２日には大坂から四国へ向けて出陣の予定

➡渡海軍は織田信孝、丹羽長秀、蜂屋頼隆、津田信澄ら一門・尾張衆によって構成され、取次の光秀は排除

▼（天正 10 年）５月 21 日付 斎藤利三宛長宗我部元親書状（石谷家文書）

「一宮をはじめ、夷城、畑山城、牛岐城、仁宇南方は明け渡しますので、信長にお伝えください。しかしながら、どうしても海部・大西の両城は私が保持する必要があります。これは阿波・讃岐への野心のためではなく「ただ当国（土佐）の門」として両城を保持せねばならないのです」

➡この期に及んで元親は阿波国内の交通上の要地にある海部・大西両城は決して渡さないと明言。光秀による調停の条件も失われ、四国出兵の泥沼化は必定。「本能寺の変」はじつに四国出陣当日に勃発

2）中国

毛利攻めの最前線にあっていまや尾張衆の最右翼に位置することになった秀吉は、信長の前線への動座を要請

天正 10 年夏、光秀はまたも尾張衆の遊撃隊として藤孝以下の畿内衆を率いての出陣を命じられる

【小括：「本能寺の変」の性格―３つの観点―】

⒜ 国制の観点

将軍が京都の外にあって騒乱が持続するというイレギュラーな状態を「御故実」に基づく幕府体制へと戻す復古的性格。ただし革命（＝revolution＝回転、メビウスの帯）はしばしば伝統的国制の枠に収まる

→明治維新＝王政復古／フランス革命＝ブルボン王朝の復活

⒝ 光秀・信長の歴史的性格の観点

1580 年段階の畿内近国で近世の契約的統治体系を構築したのは、当該地域の征服地で自治的な百姓団体（村）や地域社会と向き合いつつ信長の数値根拠なき動員を受け続けた光秀ら直臣大名たち

→四国・中国への二正面作戦開始の時点で頂点に達した彼らと信長との矛盾を一気に解消する性格

⒞ 権力構造の観点

血縁や出自などをめぐる主君との関係の深浅が実力・実績主義に優越して各家臣の配置・処遇を規定する

→封建的（＝主従制的、地域的）権力特有の性格が払拭されず、そこから生じた家臣団の分裂が暴発した性格

➡国制の金冠部分、統治形態、封建的権力の属性にわたる、織田権力の構造的帰結としての「本能寺の変」

Ⅲ 新たな「天下」の統合に向けて

1. 明智光秀の政権構想

⑴ なぜ信長を消したのか―「本能寺の変」７日後 光秀の細川父子への自筆誓約書（永青文庫細川家文書）第３条―

「私が不意の信長殺害を思い立った理由は、娘婿の忠興などを取立てようとの意図によるもので、他意はありません。50 日か 100 日のうちには畿内近国の政治状況は安定するでしょうから、それ以後は、私の後継者明智光慶や忠興などにそこの実権を引き渡して、私は身を引くつもりです。詳しくは、２人の使者が申し伝えます」

➡将軍を推戴し「御故実」に基づく五畿内「天下」体制を再構築し、その上で「諸国」大名といかなる関係を結ぶつもりであったのか？　新たな統合実現の方向を以下のように想定

大名領検地＝領知高に基づく支配従属関係構築／領知高の確定と連動して領国境目を確定し領土紛争を抑止

⑵ 細川藤孝の選択

▼美濃出身の光秀が表舞台に登場する契機をつくったのは細川藤孝。天正 10 年時点では光秀の姻戚であり、かつ光秀の軍事統率権のもとにあったにもかかわらず、いち早く秀吉と通じて領国丹後を動かず、情勢に大きな影響を与える

➡室町幕臣エリート出身でありながら将軍義昭から離れ、究極の内戦を経験し、かつ天皇制的学芸の権威（古今和歌集＝勅撰和歌集解釈秘伝の相伝者）となっていた藤孝にとって、先行国家の枠組みに基づく再統合の実現が可能なら、誰が天下人になるかには拘らなかった→その意味で藤孝の歴史と権力をみる目は透徹

2. 関白秀吉の「惣無事」（平和令）と細川幽斎（藤孝）

⑴ 伝統的将軍権限に大名領土裁判権はなし

▼（元亀３年）６月 28 日付 毛利輝元宛足利義昭停戦令（長府毛利文書）

「豊後大友氏と安芸毛利氏との和平のこと、早速に判断して実現することが肝要である。詳しくは安国寺を差し向ける」

▼（元亀２年）２月 28 日付 大友宗麟宛織田信長添状（大友文書）

「大友・毛利の和睦について、再度将軍足利義昭の停戦令を伝える使者が京都から派遣された。この際、万端をなげうって和睦し、天下に貢献（「天下之儀御馳走」）してはどうか。使者もそうした旨を貴殿に説明するだろう。なにとぞよろしく」

➡私的紛争の停止と「天下」＝幕府体制への貢献を抽象的に説くだけで、将軍や信長が大名領土裁判権を行使することはまったく想定されていないし、そうした事実もない

⑵ 領土裁判権原の発見─いわゆる九州惣無事令─

▼天正13年10月2日付 島津義久宛秀吉直書（関白就任直後、島津家文書）

「本直書は天皇の命で発給する。関東から奥州まで残すことなく、天皇の命令によって「天下静謐」なったにもかかわらず、九州ではいまだに紛争が続いているのは不適切である。領土紛争（「国郡境目相論」）は、秀吉が当事者の主張を聞き届けた上で裁定する。なのでまず敵味方とも戦闘を停止せよ。これは天皇の意思（「叡慮」）である。無視するならすぐに制裁を加えるので、この返答は紛争当事者にとっては「一大事」である。熟考して返答されたい」

➡将軍権限・権威ではなく、武家政権に先行する国家に由来する国土高権（天皇の国土に対する権限）を法形式上の根拠に、大名どうしの領土紛争を「国郡境目相論」と規定して領土裁判権を行使。秀吉はそのために関白に任官

紛争地域の領有変遷の歴史を調査して領土裁定に取り組んだ豊臣政権の広域停戦・国分令（「惣無事令」）と、義昭・信長幕府の停戦令との間には、決定的な段階差が存する

⑶ 細川幽斎（藤孝）の役割

1）秀吉・島津氏の取次

①秀吉直書には幽斎と利休が連署した添状が付され、島津家中は即事停戦受諾の意思を「由来なき仁」たる秀吉ではなく「細川兵部入道殿」＝幽斎に宛てて示す←奉公衆時代から島津氏と将軍とを取次いできた実績

②島津氏は豊臣政権の領土裁定を一度は拒否するが強制執行の出兵をうけ降参し（いわゆる九州征伐）、２度目の裁定を受諾、江戸時代の島津領が画定された→関東・奥羽の諸大名領主へと適用拡大、「秀吉の天下統一」の内実

2）豊臣政権による文化統合の担い手

直書と添状が発給された直後の10月6日、幽斎は秀吉の推挙によって僧体の最高位である「法印」に叙せられ（永青文庫細川家文書）、翌日には宗易が利休居士の号を天皇から下賜される

→彼らは歌学と茶湯の最高権威として聚楽第に居所を持ち、諸国大名の文化的統合を担う

▼古今伝授とは

「古今和歌集」は初の勅撰和歌集（天皇・上皇の命によって編纂された和歌集）。その解釈秘伝は、単なる和歌解釈ではなく、天皇を頂点とした位階・官職秩序、つまり伝統的国家の成り立ちを表現。幽斎はこれを王家に伝授。島津義久のような地方大名にとって、幽斎の歌学を伝受することは国家統合の奥義に連なることを意味した

➡藤孝にとって、「室町幕府の滅亡」から「本能寺の変」を経て「豊臣の平和」実現までの長い過程は、大名の地域支配を前提としたまったく新しい実質を持った国家統合の実現のために主体的に決断を重ね、自らの最終的な役割を見いだしていった過程

おわりに

▼信長の仕事はすべて歴史を前進・革新させるものであったというのが通説

しかし現実の歴史を動かすパワーは信長自身の意思が及ばないところに現われ、「本能寺の変」へと帰結した

▼室町期の武士領主階級上層から出た信長／京都政界の最高のエリート藤孝／幕府陪臣から実力主義で登りつめた光秀

「室町幕府の滅亡」から「惣無事」実現までの政治過程には、３人に象徴される３つの要素が絡み合っている

▼戦乱の中世・戦国時代から200年以上の平和状態＝「天下泰平」への大転換は、日本史上の革命的画期をなす

武士領主階級の大幅な入れ替わり（下剋上！）／貴族・武士の領有する荘園制度から百姓身分の自治団体である村共同体に依存した領国社会へ／諸国大名を序列化し対外関係を極限的に管理して長期非戦を実現

➡３人が果たした役割をあらためて見つめ直していくべき

【主な参考文献】

▼天野忠幸「信長と畿内大名」（藤田達生編『織田政権と本能寺の変』塙書房、2021年）▼池上裕子『織田信長』（吉川弘文館、2012年）▼稲葉継陽「細川幽斎と信長・秀吉・家康」（熊本県立美術館図録『細川幽斎展』2010年）▼稲葉継陽「新・明智光秀論」（公益財団法人永青文庫・熊本大学永青文庫研究センター編『永青文庫の古文書　光秀・葡萄酒・熊本城』吉川弘文館、2020年）▼稲葉継陽「明智領国の形成と歴史的位置」（同『近世領国社会形成史論』吉川弘文館、2024年）▼神田千里『織田信長』（ちくま新書、2014年）▼久野雅司『足利義昭と織田信長』（戎光祥出版、2017年）▼高木傭太郎「織田政権期における「天下」について」（藤木久志編『戦国大名論集17 織田政権の研究』吉川弘文館、1985年）▼藤木久志『豊臣平和令と戦国社会』（東京大学出版会、1985年）▼水野嶺『戦国末期の足利将軍権力』（吉川弘文館、2020年）▼浅利尚民・内池英樹『石谷家文書 将軍側近のみた戦国乱世』（吉川弘文館、2015年）▼公益財団法人永青文庫・熊本大学永青文庫研究センター編『織田信長文書の世界 永青文庫珠玉の60通』（勉誠社、2024年）

第 18 回永青文庫セミナー

横井小楠の人脈と思想形成過程

2024/11/03　於 熊本大学ひご未来図書館

熊本大学永青文庫研究センター　今村 直樹

はじめに

概要　幕末日本を代表する思想家・儒学者の横井小楠（1809-1869）。彼が当事者の一人となった天保・弘化期（1830-1847）の熊本藩政における実学党問題を主に再検討し、その後の小楠に与えた影響について考察

◇　横井小楠の思想とその特質

・　勝海舟が「天下で恐ろしいもの」と称した小楠：幕末期にあって日本のあり方を世界・地球規模の観点で模索

・　嘉永 6 年（1853）「夷虜応接之大意」【1】：「有道の国」には国交を認めなければ、「万国」の「信義」を失う

・　慶応 2 年（1866）「録二語送左大二姪」【2】：日本が果たすべきは「大義」（正義人道）を世界に広めること
　→〝日本は「世界の世話やき」となり、大量殺戮をやめさせるべし〟という発言とも共通（『関西巡回記』）

・　五か条の誓文（慶応 4 年）の「広く会議を興し、万機公論に決すべし」：起案者の一人由利公正は小楠の弟子

◇　小楠研究および実学党研究の課題

・　厖大な蓄積をもつ小楠研究：but 彼の名が知られる以前、とくに実学党をめぐる 30 代の動向は検討の余地あり
　→横井小楠文書、細川家文書、松井家文書等からは、小楠が熊本藩政に登場する過程を跡付けることが可能！

・　実学党とは：小楠・米田是容・元田永孚らで構成される改革派集団。天保 14 年（1843）結成説が有力。通説的には、思想的親和性がある水戸藩の徳川斉昭が弘化元年（1844）に謹慎を命じられたことで弱体化、と理解

・　実学党研究の課題①：小楠やそのメンバーの視点からの研究が主。対立勢力からみた実学党の姿とは？

・　実学党研究の課題②：実学党≠近代政党。幕末期の「党」「朋党」[1]は、政治的意図をもつ集団を非難する言葉
　→幕末期、イギリスで「政党」に初めて接した際の福澤諭吉の反応【史料 1】
　⇒同時代的には批判的に捉えられがちだった「党」「朋党」。この視点をふまえた実学党問題の再検討が必要

◇　本報告の課題

①　天保・弘化期の熊本藩政における実学党の形成・展開過程を再検討。そこでの小楠の立ち位置とは？

②　実学党による藩政の掌握が挫折した後、小楠の「朋党」観はどのように変わったのか？

③　藩政掌握が挫折した後（嘉永 4 年の半年間）、小楠は諸国を遊歴。それはどのような意味をもったか？

1.　実学党の形成・展開と小楠

◇　キーパーソンとしての下津久馬

・　下津久馬（1808-1883）：1000 石取の大身家臣。実学党メンバーかつ小楠の親友【3】だが、あまり注目されず

・　「先祖附」【4】：天保 3 年（1832）奉行就任。同 6 年老中松平康任から、同 9 年老中水野忠邦からそれぞれ褒賞
　→江戸城二の丸修復普請、天保飢饉時の江戸廻米で活躍。久馬の奉行就任は、家老米田是容（長岡監物）の推挙
　⇒当時の小楠は是容と時習館改革に取り組んでいたが、藩の表舞台で華々しく活躍していたのは久馬

・　第一家老松井家と米田家との対立：文政元年（1818）八代妙見宮の祭礼をめぐる紛争以来、険悪な関係に

[1] ①主義、利害などを同じくする人々の団体。徒党。②特に中国で、官僚が政治的に結び、互いに抗争した団体をいう（『日本国語大辞典』）。

→是容が久馬を重用し、藩政に影響力を及ぼすと、家老松井督之（ただゆき）（長岡山城）は久馬転役を画策⇔是容は反対
・ 天保 9 年 8 月 10 日付米田是容書簡【5】：〝いっそ私を免職すれば御威光も立つ〟と、捨て身で松井に迫る
・ 久馬転役問題の背景――同年 8 月 20 日付溝口貞直申上書【6】：久馬は「専ラ党を結」び、人事に不公平あり
→「党」をなす久馬およびその転役に抵抗する是容を痛烈に批判。その後、久馬や是容は辞職を余儀なくされる
⇒天保 14 年結成説が唱えられる実学党の原型は、既に天保 9 年時点で存在。その中心的人物は久馬（≠小楠）

◇ **実学党による藩政掌握をめざした小楠**
・ 転役問題の結末：久馬は奉行、是容は文武芸倡方（いざないかた）を辞職。小楠も時習館の居寮長を解任され、江戸遊学へ
・ 天保 10 年 6 月 17 日付米田是容書簡【7】：辞職後の久馬は毎晩酒宴と報告。一方、江戸の小楠の酒癖も心配
→この半年後、小楠は藤田東湖との忘年会で飲みすぎ、御家人を殴る事件を起こす。翌 11 年 4 月に帰国
・ 弘化 3 年（1846）「実学ニ付聞方」【8】：帰国後の小楠は久馬とともに是容へ出入りし、「実学研究」と称する
→小楠は時習館で大きな影響力を発揮。〝家中の風俗を変えるため、まず学生より教育〟との発言が記録
⇒〝徐々に衆人を「我党」に引き込めば、50 年後の藩庁役人はすべて「我党」に〟【10】の発言とも類似
・ 弘化 2 年 11 月 18 日付米田是容書簡【9】：〝「我党」の荻昌国（まさくに）を「学監」職とするのは、来年を待つのが妥当〟
→人事機密に関する生々しい史料！是容と小楠は、時習館の要職に実学党のメンバーを入れ込もうと計画
・ 弘化 3 年 10 月目付中上申書【11】：是容や小楠への相次ぐ批判を受け、藩主細川斉護（なりもり）は実学党の排除を検討
→小楠には「党を立」てないよう教諭。〝是容の文武芸倡方を解任すれば、「実学連」は自然に衰える〟と提言
⇒結果、是容は同年 11 月に解任。さらに翌年 3 月には家老も辞職。ここに実学党による藩政掌握は挫折

2. 小楠の「朋党」観の変容

◇ **実学党による藩政掌握の挫折は、その後の小楠にいかなる影響を与えたのか？**
・ 久馬失脚後、実学党の中心的人物として勢力の拡大を目指した小楠。実学党による藩政掌握を意図
・ 実学党を批判する論理：〝利につられて集まった小人の集団〟【11】。儒教的な「朋党」観とも共通
→家中や斉護からの厳しい批判を経験し、その後の小楠の「朋党」観はどうなったのか？
・ 嘉永 4 年（1851）2 月 15 日付藤田東湖宛書簡写【16】：「天下列藩之大病根」は「朋党」の二字にあり
→藤田の蟄居処分をもたらした水戸藩の藩内抗争、前年 6 月久留米藩の村上量弘（かずひろ）の遭難を例示して主張
⇒実学党による藩政掌握を目指した姿勢から変じ、「朋党」による藩内抗争を強く批判
・ 元治元年（1864）秋、井上毅との対談記録「沼山対話」【史料 2】：「分党の憂」をなくすには何が必要か？
→小楠は、君主の努力次第で「朋党の禍」は抑止できると回答。水戸藩の抗争の要因は徳川斉昭の「不明」
⇒小楠は「朋党」を厳しく批判。その背景には、自身が当事者となった藩内抗争の苦い経験、あるいはそれへの反省が存在か

3. 諸国遊歴と他藩士との交流

◇ **世界を視野に入れた小楠の議論――その起点として、一藩をこえた視点はどのように培われたか？**
・ 嘉永 4 年（1851）2 月から 8 月まで小楠は諸国を遊歴。九州・近畿・中部各地方の 21 藩を訪問
・ 嘉永 4 年「畏斎先生遊歴之節々諸国之風土御見聞書写」【12】：小楠が見聞内容を随行者に口述筆記させたもの
→各藩の士風・学風・民政などを率直に評価。猪飼隆明は〝小楠の思想形成に重要な意味を持つ経験〟と評価[2]
・ 後年、西郷隆盛は薩摩藩の子弟に諸国遊歴を命じるが、その際に模範例としたのは小楠の遊歴【史料 3】
→小楠は、遊歴の目的を〝将来の「天下の政」に備え、「一途政体」を考えるため〟と発言したという

---

[2] 【猪飼 2024：181 頁】。

⇒各藩の政治の長所・短所を実見することで、一藩をこえ、日本（そして世界）へ広がる視点が深化

◇　**小楠を重要視していた薩摩藩士たち**

・　嘉永7年ヵ1月5日付関広国書簡【14】：関は島津斉彬（なりあきら）の側近であり、薩摩藩の重要人物
　　→重要なのは関による文末の漢詩。〝肥後と薩摩が心を一つにし、外国と戦おう〟と小楠に呼びかけ

・　嘉永7年1月29日付八田知紀書簡【15】：ペリー再来航という薩摩藩の最新情報を小楠に提供
　　⇒薩摩藩関係者から高く評価されていた小楠。両者の交流に関する検討は、今後の重要な研究課題

おわりに

◇　**実学党の形成・展開と小楠**

・　初期実学党の中心的人物だった下津久馬：批判勢力は、既に天保9年の段階で久馬による「党」を認識

・　久馬の失脚後、小楠の存在が浮上。米田是容とともに実学党による藩政掌握を目指すが、結果的に挫折
　　→実学党が弱体化したのは、小楠らによる運動が、家中や藩主斉護の反発を買い、弾圧されたため
　　⇒小楠の周辺に光を当てることで、知られざる実学党の形成・展開過程が浮き彫りに

◇　**藩政掌握の挫折と小楠**

・　嘉永年間以降の小楠は「朋党」を厳しく批判。その背景には、上記の挫折や自身への反省が存在か

・　〝文久期の小楠は、「公論」を形成する公開討論の場が、朋党同士の暴力的衝突の場にならないようにするため、西欧の議会制導入を求めた[3]〟という前田勉の理解。小楠の思想は、五か条の誓文から議会制導入へと継承
　　→「朋党」批判を含み込んで形成された小楠の「公論」思想：彼の熊本での挫折にも大きな意義があり
　　⇒未だ検討の余地がある初期の小楠や実学党をめぐる動向。横井小楠文書の寄贈を契機とした研究の深化へ

参考文献

・　猪飼隆明『維新変革の奇才　横井小楠』（角川書店、2024年）
・　鎌田浩『熊本藩の法と政治』（創文社、1998年）
・　熊本大学永青文庫研究センター『永青文庫叢書　細川家文書　意見書編』（吉川弘文館、2022年）
・　堤克彦『横井小楠の実学思想』（ぺりかん社、2011年）
・　朴薫「武士の政治化と『学党』」（塩出浩之編『公論と交際の東アジア近代』東京大学出版会、2016年）
・　前田勉『江戸の読書会』（平凡社、2012年）
・　蓑田勝彦「熊本藩主＝細川斉護の『実学連』排除」（『熊本史学』92、2010年）
・　宮川聖子「横井小楠と小河一敏」（熊本県立美術館編『横井小楠と小河一敏』土佐の龍馬・肥後の小楠展実行委員会、2017年）
・　山崎正董『横井小楠　遺稿編』（大和学芸図書、1977年復刻版。初版は1938年）
・　山田央子「政党」（米原謙編『政治概念の歴史的展開　第9巻　「天皇」から「民主主義」まで』晃洋書房、2016年）
・　渡辺浩『日本政治思想史』（東京大学出版会、2010年）

[3] 【前田2012：312-317頁】。

永青文庫研究センター年報
第16号（2024年度）

発行日：2025年３月31日
発行者：熊本大学永青文庫研究センター
〒860－8555
熊本市中央区黒髪2－40－1
TEL　096－342－2304
印刷所：シモダ印刷株式会社